

垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書(10)

—砂防激甚災害対策特別緊急工事（垂水市牛根麓地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

# 西ノ原遺跡



2009年3月

垂水市立図書館



110432606

鹿児島県垂水市教育委員会





土器溜り検出状況



土器溜り





遺跡近景



入れ子状に出土した土器



完掘状況



作業風景



出土土器集合写真

## 序 文

大隅半島の北西部に位置する垂水市は、眼前に鹿児島湾の美しい海岸線を望み、背後には手つかずの自然が残る高隈の山々が連なっています。このように美しい自然に育まれた本市においては、昔から多くの人々が生活を営み、文化を育て、多くの有形・無形の文化財が残されています。

本報告書は、平成19年度に、牛根麓地区の西ノ原遺跡において、県の補助事業として実施された砂防激甚災害対策特別緊急工事に伴う埋蔵文化財の調査を、記録としてまとめたものです。西ノ原遺跡からは、大量かつ多種多様な古墳時代の土器が発見されており、これらは南九州の古墳時代の研究において非常に重要な資料と成り得るものです。このように重要な資料である本報告書が、市民をはじめ広く活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解を深めていただく一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、多大なご指導・ご協力をいただきました鹿児島県教育庁文化財課、鹿児島県立埋蔵文化財センター、鹿児島大学をはじめとする各研究機関、発掘調査及び整理作業協力者をはじめとする各関係各位に心から敬意を表します。

平成21年3月

垂水市教育委員会

教育長 肥後昌幸

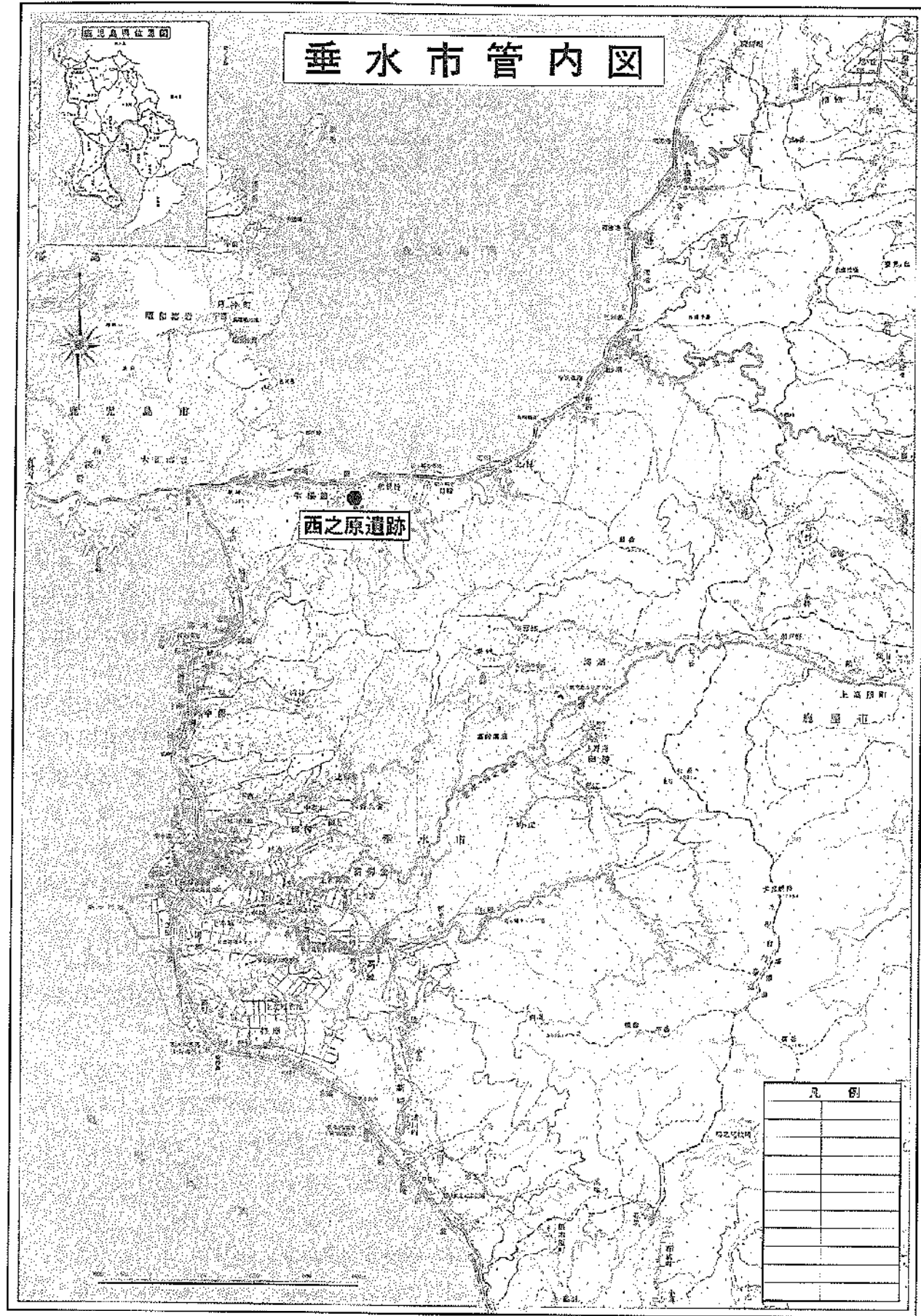
## 報告書抄録

ふりがな	にしのはらいせき							
書名	西ノ原遺跡							
副書名	砂防激甚災害対策特別緊急工事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	10							
編集者名	羽生文彦							
編集機関	垂水市教育委員会							
所在地	〒891-2125 鹿児島県垂水市旭町61-2 TEL 0994-32-0224							
発行年月日	2009年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くぬぎばるかいづか 終原貝塚	かごしまけん 鹿児島県 たかみづし 垂水市 うしね 牛根 うしねふもと 牛根麓	462144	11-37	31° 33' 04"	130° 44' 08"	20070628 ～ 20070712	50	砂防激甚災害 対策特別緊急 工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
西ノ原遺跡	包蔵地	古墳時代		—		成川式土器		土器溜り
要約	<p>西ノ原遺跡は、平成17年9月に垂水市を通過した台風14号による災害復旧工事（砂防激甚災害対策特別緊急工事）が起因となり調査された遺跡である。そのため、調査は、最低限必要な範囲・期間・方法で実施することになった。具体的には、土器溜りに限定して調査を行った。</p> <p>出土遺物は古墳時代のいわゆる成川式土器に限定されることから、遺跡の時代も同時代と考えられる。</p>							

## 例言

- 1 本報告書は、垂水市教育委員会が、平成19年度に実施した、砂防激甚災害対策特別緊急工事（牛根麓地区）に伴う埋蔵文化財（西ノ原遺跡）緊急発掘調査についての調査報告書である。
- 2 平成19年度に実施した発掘調査及び平成20年度に実施した報告書作成事業において、鹿児島県教育庁文化財課埋蔵文化財係文化財主事堂込秀人氏に指導・助言をいただいた。また、一連の作業中、鹿児島県教育庁文化課及び鹿児島県立埋蔵文化財センターから貴重な指導・助言をいただいた（文中に登場する役職名等は、全て当時のものである）。
- 3 本書に用いたレベル数は絶対海拔高度である。
- 4 本書の遺物番号は通し番号を用い、図版中の番号も一致する。
- 5 発掘調査ならびに整理作業における出土遺構・遺物の測量・実測・製図・写真撮影等は羽生・梶原・堀田が行った。
- 6 本書の執筆担当は以下のとおりである。  
第I章～第IV章 羽生文彦
- 7 本書の編集は羽生が行った。
- 8 本遺跡の出土遺物は垂水市教育委員会が保管・展示するものである。





付図 西ノ原遺跡の位置

## 本文目次

序文	
報告書抄録	
付図	
例言	
目次	
第I章 調査の経緯	1
第1節 調査に至るまでの経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査の経過	2
第II章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地形概説	3
第2節 歴史概説及び周辺の遺跡	3
第III章 調査の概要	6
第1節 発掘調査の概要	6
第2節 層序	6
第3節 遺構	8
第4節 出土遺物	9
第IV章 まとめ	35
あとがき	

## 挿図目次

付図 西ノ原遺跡の位置	
第1図 周辺の遺跡	5
第2図 調査地点と周辺の地形	7
第3図 土器溜り	8
第4図 西ノ原遺跡出土土器(1)	21
第5図 西ノ原遺跡出土土器(2)	22
第6図 西ノ原遺跡出土土器(3)	23
第7図 西ノ原遺跡出土土器(4)	24
第8図 西ノ原遺跡出土土器(5)	25
第9図 西ノ原遺跡出土土器(6)	26
第10図 西ノ原遺跡出土土器(7)	27
第11図 西ノ原遺跡出土土器(8)	28
第12図 西ノ原遺跡出土土器(9)	29

第13図	西ノ原遺跡出土土器(10)	30
第14図	西ノ原遺跡出土土器(11)	31
第15図	西ノ原遺跡出土土器(12)	32

## 表 目 次

付 表	報告書抄録	
第1表	周辺遺跡地名表	4
第2表	西ノ原遺跡出土土器 小片点数・重量一覧	9
第3表	西ノ原遺跡包含層出土土器観察表(1)	32
第4表	西ノ原遺跡包含層出土土器観察表(2)	33
第5表	西ノ原遺跡包含層出土土器観察表(3)	34
第6表	西ノ原遺跡出土の成川式土器と、 中村の提示する成川式土器分類との対応表(器種別)	37
第7表	西ノ原遺跡出土の成川式土器と、 中村の提示する成川式土器分類との対応表(時期別)	37

## 図 版 目 次

巻頭図版1		
巻頭図版2		
写真1	平成19年度発掘作業員	2
図版1	西ノ原遺跡出土遺物(1) 甕形土器1	39
図版2	西ノ原遺跡出土遺物(2) 甕形土器2, 壺形土器1	40
図版3	西ノ原遺跡出土遺物(3) 壺形土器2	41
図版4	西ノ原遺跡出土遺物(4) 壺形土器3, 高杯形土器	42
図版5	西ノ原遺跡出土遺物(5) 鉢形土器	43
図版6	西ノ原遺跡出土遺物(6) 埴形土器	44
図版7	西ノ原遺跡出土遺物(7) ミニチュア	45

## 第I章 調 査 の 経 緯

### 第1節 報告書作成に至るまでの経緯

平成17年9月に垂水市を通過した台風14号による災害復旧工事(砂防激甚災害対策特別緊急工事)が、平成19年3月30日から鹿児島県大隅地域振興局(以下、大隅地域振興局)により、垂水市牛根麓地区で実施されていた。平成19年5月15日、工事中に埋蔵文化財と思われる土器片が多数発見された旨が、大隅地域振興局から垂水市教育委員会社会教育課(以下、市社会教育課)に報告された。報告を受けた市社会教育課では、早速現地に赴き現地調査を行い、遺物が古墳時代の成川式であることを確認、一旦遺物発見現場周辺での工事を中止するよう求め、同時に鹿児島県教育庁文化財課(以下、県文化財課)に指示を仰いだ。

県文化財課の指示を受け、平成19年6月20日に、大隅地域振興局、県文化財課、市社会教育課、垂水市土木課(以下、市土木課)の4者による協議が開催された。協議の結果、大隅地域振興局に埋蔵文化財に対するご理解をいただき、設計変更が不可能である50㎡について、平成19年度に埋蔵文化財緊急発掘調査が実施されることとなった。なお、調査については、起因となる事業が砂防激甚災害対策特別緊急工事であるという事情を鑑み、最低限必要な範囲・期間・方法で実施することになった。また、遺物出土レベルまでの表土掘削と費用及び作業員の確保については、開発側に実施していただくこととなった。

西ノ原遺跡の発掘調査は、平成19年6月28日から7月12日まで実施した。

調査後、平成19年11月27日に、大隅地域振興局、県文化財課、市社会教育課、市土木課の4者で遺跡の整理作業について協議を行った。その結果、平成20年度に報告書作成事業を実施することになった。

報告書作成事業は平成20年6月に開始し、平成21年3月まで実施した。

### 第2節 調査の組織

調査の組織は以下のとおりである。

#### 平成19年度発掘調査

事業主体	鹿児島県大隅地域振興局		
調査主体	垂水市教育委員会		
調査責任者	〃	教 育 長	肥 後 昌 幸
調査企画	〃	社会教育課長	梅 木 勇
調査事務	〃	文化係長	水 口 光 則
調査担当者	〃	文化係文化財主事	羽 生 文 彦
		※企画課主査との兼任辞令	
		文化係主事	梶 原 剛

#### ※平成19年度発掘作業員

永倉親一・福元淳也・池畑政美・鶴窪輝美

平成 20 年度 報告書作成作業

事業主体	鹿兒島県大隅地域振興局
調査主体	垂水市教育委員会
調査責任者	” 教 育 長 肥 後 昌 幸
調査企画	” 社会教育課長 橋 口 正 徳
調査事務	” 文化係長 水 口 光 則
	” 文化係副主幹 堀 田 徳 隆
調査担当者	” 文化係文化財主事 羽 生 文 彦
	” ※企画課主査との兼任辞令
	” 文化係主事 梶 原 剛

※平成 20 年度整理作業員

小出光子・寺迫美里・西尾衣久美・栢山 栄

第 3 節 調査の経過

発掘調査は、平成 19 年 6 月 28 日から 7 月 12 日まで実施した。

報告書作成事業は、平成 20 年 6 月 16 日から平成 21 年 3 月まで実施した。

発掘調査の経過は以下の日誌抄のとおりである。

【日誌抄】

- 平成 19 年 6 月 28 日 (木) 発掘調査開始。調査環境の整備 (作業道具の搬入、レベル起こし等) ~ 21 日 (金) を行う。  
作業員による掘り下げを開始。古墳時代の成川式を出土する遺物包含層を確認。
- 平成 19 年 7 月 2 日 (月) 遺物が土器溜り状に範囲を特定して出土していることを確認。出土 ~ 7 月 6 日 (金) 範囲を記録・写真撮影後、出土遺物の取り上げを開始。遺物包含層が非常に硬質であるため、発掘作業が若干遅れ気味に。
- 平成 19 年 7 月 9 日 (月) 遺物の取り上げを終了。土層堆積状況の記録、遺跡の近景及び遠景 ~ 7 月 12 日 (木) の写真撮影を行った。作業道具の撤去当を行い、発掘調査を終了した。

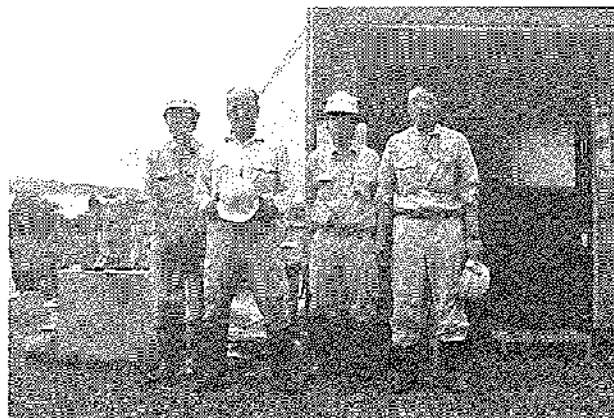


写真 1 平成 19 年度発掘作業員

第 II 章 遺跡の位置と環境

第 1 節 地形概説

西ノ原遺跡は、直線距離で垂水市街地の北東約 8 km の地点 (北緯 31° 33′ 04″, 東経 130° 44′ 08″) の地点に位置する。

牛根地区は、始良カルデラの外輪山の内壁に位置し、山が海岸にまで迫っており、海岸近くのわずかな平野部分周辺に人家が広がっている。

加治木、国分、敷根、福山、牛根が抱く東錦江湾は、始良カルデラと三紀以前の噴火の跡に水が溜まったとされている。故にその周辺は皆火口の縁である。その中でも最高峰は牛根の鹿倉峠の嶋 (びしゃご) 岳で、標高約 880 m である。鹿倉峠を中心に、一大森林地帯を現出し、深山幽谷雑木天を覆い、昼なお暗く、獣や鳥の繁殖地である。

鹿倉峠よりカルデラに落ち込む山腹を大別すれば三区となる。すなわち麓地区、二川地区、境地区の三区である。西ノ原遺跡は、このうち麓地区に位置する。

調査区域は、山が海岸近くまで迫った山裾、人家の隣接地である。山裾の谷状になった部分に小さな河川 (麓の小川) が流れており、調査区域はその河川に隣接する。

第 2 節 歴史概説及び周辺の遺跡

垂水市中央～南部にかけては、近年の鹿兒島県教育委員会による広域分布調査や、垂水市教育委員会が実施してきた発掘調査の結果、縄文～中世の城跡まで様々な遺跡が点在していることが分かってきた (その大部分は台地上と海岸線沿いの沖積平野に集中している)。しかしながら、牛根地区においては遺跡の数は決して多くなく、発掘調査等の実施例も少なかった。

垂水市史によると、西ノ原遺跡の背後に控える陵 (西之原台地) 一帯から、弥生土器の出土が見られたとある。

西ノ原遺跡周辺は、麓地区と呼ばれる。垂水市史によると、麓の地名は、西ノ原遺跡の背後に控える山に築かれた山城である松ヶ崎城 (入船城、牛根城とも言う) の城下の意に因るとされる。

麓地区の歴史的背景として最も古い記述は、居世神社に伝わる社殿日記で、第二十九代欽明天皇の第一子が空船に乗り流されてきたとある。また、居世神社近くには第八十一代安徳天皇を御奉りしていると言われる「陵 (みささぎ)」もある。いずれも歴史上の明確な記録と断言できるものではないが、古人の足跡を現代に伝える貴重な文化財である。

前は海、後は高嶽山が続く牛根は、古より格好の隠れ場所として利用されてきた。中でも麓地区は、このように潜伏地として利用されてきた例が多く残っている。古いところでは、平家の落人が牛根に漂着したとされる。前述した松ヶ崎城も、平家が築いたものとされる。

その後暦応の頃 (北朝年号) には、牛根岩崎五郎道綱が松ヶ崎城 (入船城) に居城していたとされる。その後池袋氏、本田氏、肝付氏と城主が変遷し、永禄四年 (1561) 島津氏の手に入る。その後島津配下の武将がこの城を治め、藩政時代になると直轄領として多くの地頭が任命された。

また、松ヶ崎城城郭、西ノ原遺跡の隣接地には、花蔵院東光寺と呼ばれる寺があったとされる。



他にも麓地区には、関ヶ原の戦に敗れた浮田中納言秀家が、慶長六年（1606）から数年間島津氏の保護下、牛根浮津に潜居している。

さらに時代が下り、安政年間（1854～1858）頃には、島津斉彬が幕府の目を盗み牛根麓脇田に造船所を築き、軍艦を建造していた。

さらに時代が下がり、太平洋戦争のころにはフロート付きの海軍の飛行基地として活用された。

このように、西ノ原遺跡周辺では、確とした遺跡こそ少ないものの、太古より人々の生活の跡が刻まれている。過去、埋蔵文化財発掘調査の実施例があまりなく、今回の発掘調査が牛根麓の太古の様相を探る嚆矢となった。今後研究が進み、この地の太古の様相が明らかになることを期待する。

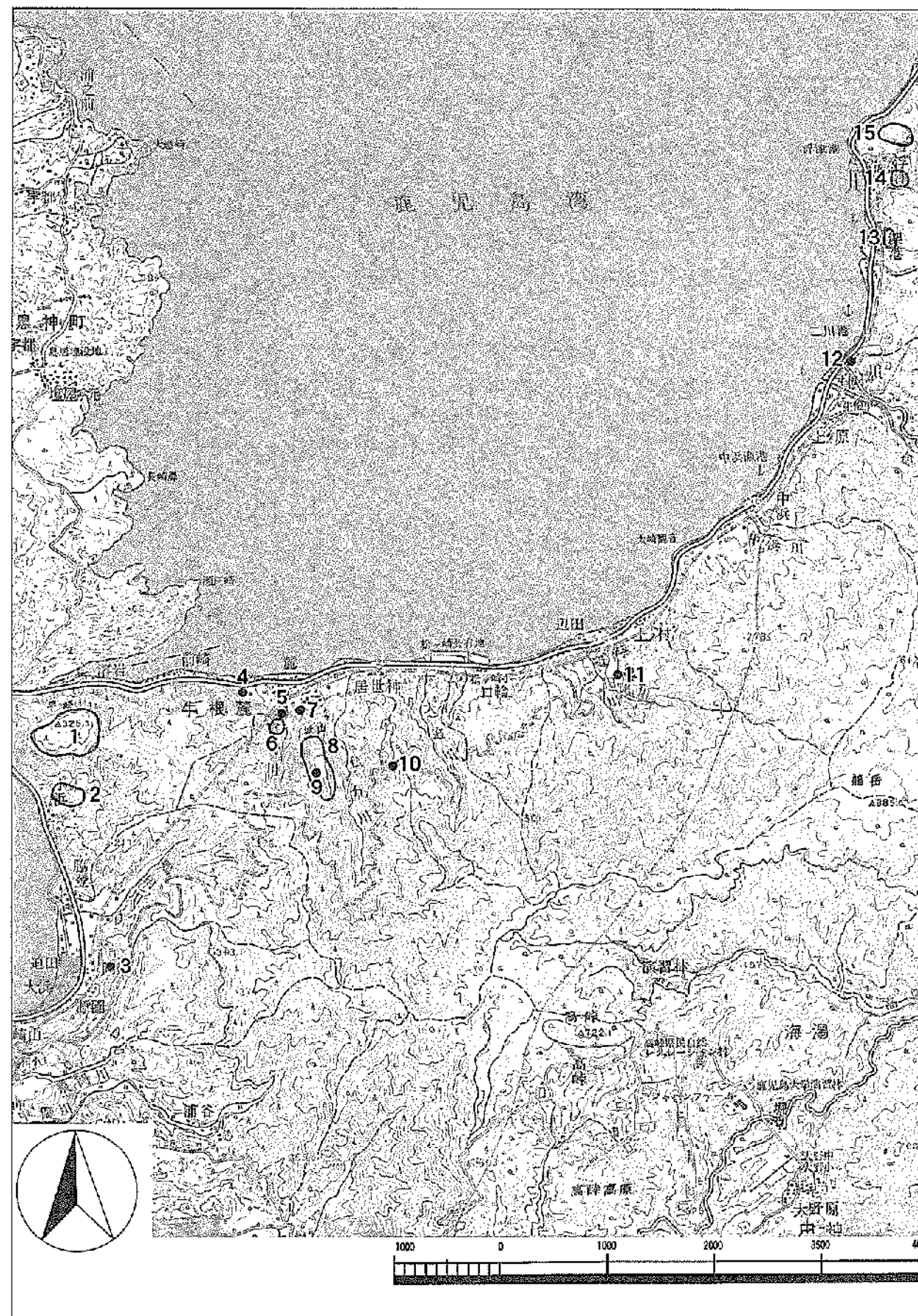
[参考文献]

垂水市教育委員会 「垂水市史 上巻」 1964

垂水市教育委員会 「垂水市文化財史料集（八）牛根編」 1989

第1表 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	早崎墓跡	鹿児島県垂水市牛根	山地	中世（室町・安土桃山）		「垂水市史」, 「三国名勝図会」
2	小浜の墓跡	鹿児島県垂水市海崎小浜	山地	中世（室町・安土桃山）		「垂水市史」, 「三国名勝図会」
3	臨海庵跡	鹿児島県垂水市海潟岡	低地	近世	高さ2mを越す三重層塔, 仏像型の残塔, 歴代住持の無縫塔	心翁寺二世円路和尚開山, 曹洞宗
4	島津越前守の墓	鹿児島県垂水市牛根麓墓地	低地	近世		「垂水市史」
5	みささぎ	鹿児島県垂水市牛根麓	山地	平安		「垂水市史」
6	西ノ原	鹿児島県垂水市牛根西ノ原	台地	古墳	成川式	牛根麓陵を含む
7	花蔵院跡	鹿児島県垂水市牛根麓	低地	中世（安土桃山）	本尊十一面観音, 無縫塔, 五輪塔	
8	入船城跡	鹿児島県垂水市牛根麓松ヶ崎	山地	中世（鎌倉・南北朝・室町・安土桃山）		「垂水市史」, 別称「松ヶ崎城」「牛根城」
9	茶園ヶ尾墓跡	鹿児島県垂水市牛根麓松ヶ崎	山地	中世（室町・安土桃山）		「垂水市史」
10	平常神跡	鹿児島県垂水市牛根麓松ヶ崎	山地	中世（室町・安土桃山）		「垂水市史」
11	七人塚	鹿児島県垂水市牛根麓	低地	平安		「垂水市史」
12	二川砦跡	鹿児島県垂水市牛根二川牟田	低地	中世		
13	深港	鹿児島県垂水市牛根深港	低地	縄文(後), 弥生(前)	市来式, 弥生土器	「垂水市史」
14	浮津	鹿児島県垂水市牛根二川浮津	台地	弥生		
15	境城跡	鹿児島県垂水市牛根境城	台地	中世		



第1図 周辺の遺跡

## 第Ⅲ章 発掘調査

### 第1節 発掘調査の概要

発掘調査は、平成19年度に実施した。調査期間は、平成19年6月28日から7月12日までであった。第Ⅰ章でも述べたように、起因となる事業が砂防激甚災害対策特別緊急工事であるという事情を鑑み、最低限必要な範囲・期間・方法で実施することになった。

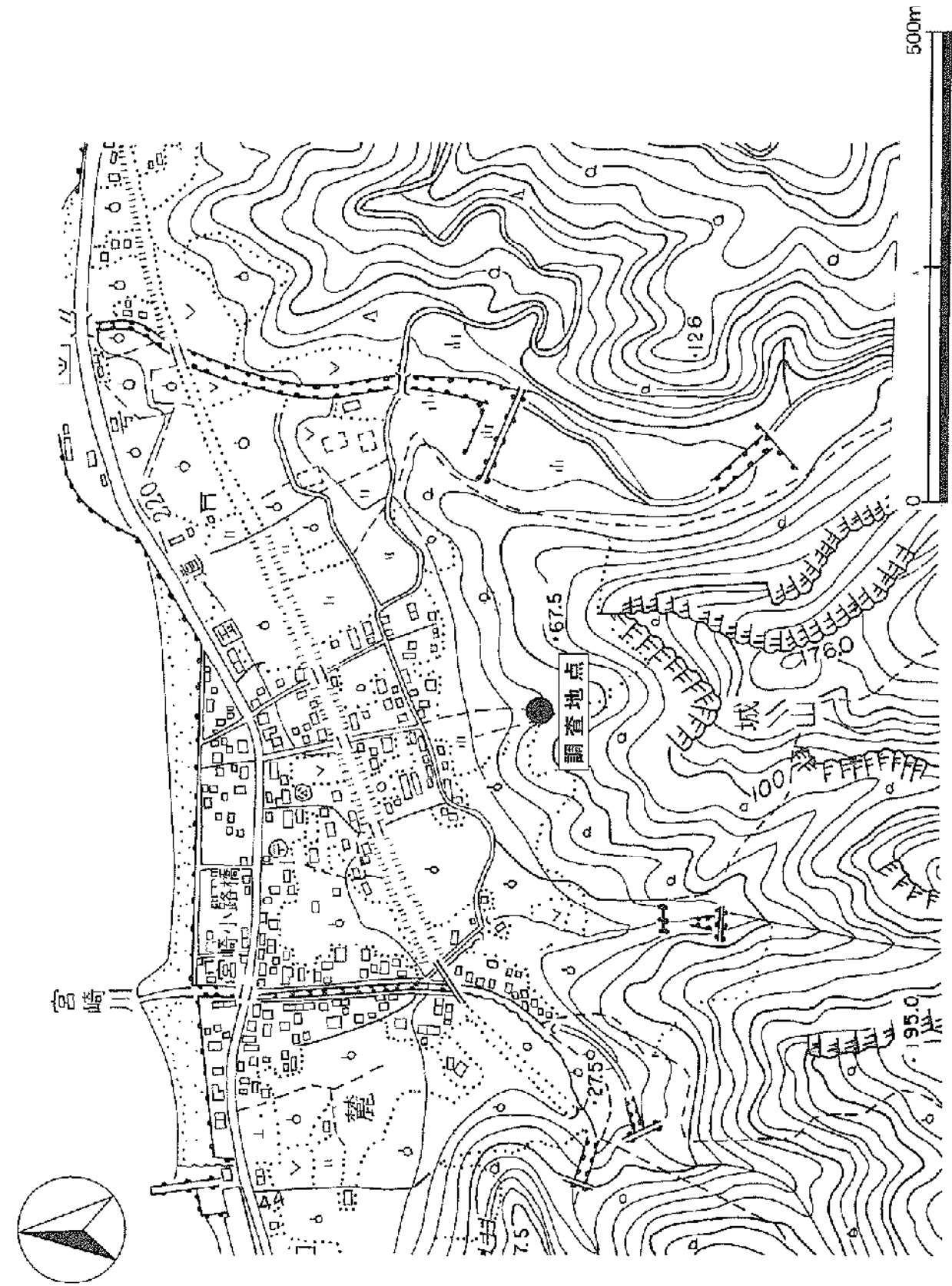
既に露出していた土器片の出土状況から、遺物が土器溜り状に出土していることが想定されたため、土器溜りの範囲を確定し、遺物を一括して取り上げる方法をとった。遺物出土レベルまでの表土掘削は、重機を使用して行った。

今回の発掘調査に関しては、この土器溜りの取り上げのみ行ったため、その他の遺構は検出しておらず、本書の報告は専ら取り上げた遺物にのみ始終することになるが、起因事業のことを鑑み、ご了承いただきたい。

### 第2節 層序

場所により若干の相違はあるが、基本的には以下のとおりである。

- I 層  にぶい黄褐色土層  
様々な土を含み分層可能である。約4m堆積している。
- II 層  褐色細土層  
細砂層。礫を多く含む。中には巨岩も含まれ、遺跡背後の台地からの土砂崩壊を想像させる。約2m堆積している。
- III a 層  極暗赤褐色土層  
細砂層。鉄分が多く、非常に硬質である。約10cmほどの堆積で、薄い層である。
- III b 層  褐色土層  
細砂層。成川式土器包含層である。鉄分が多く、硬質である。約10～30cm堆積。
- IV 層  灰黄褐色土層  
シルト質細砂層。水分を多く含み、粘性がある。いわゆる地山層である。



第2図 調査地点と周辺の地形



### 第3節 遺構

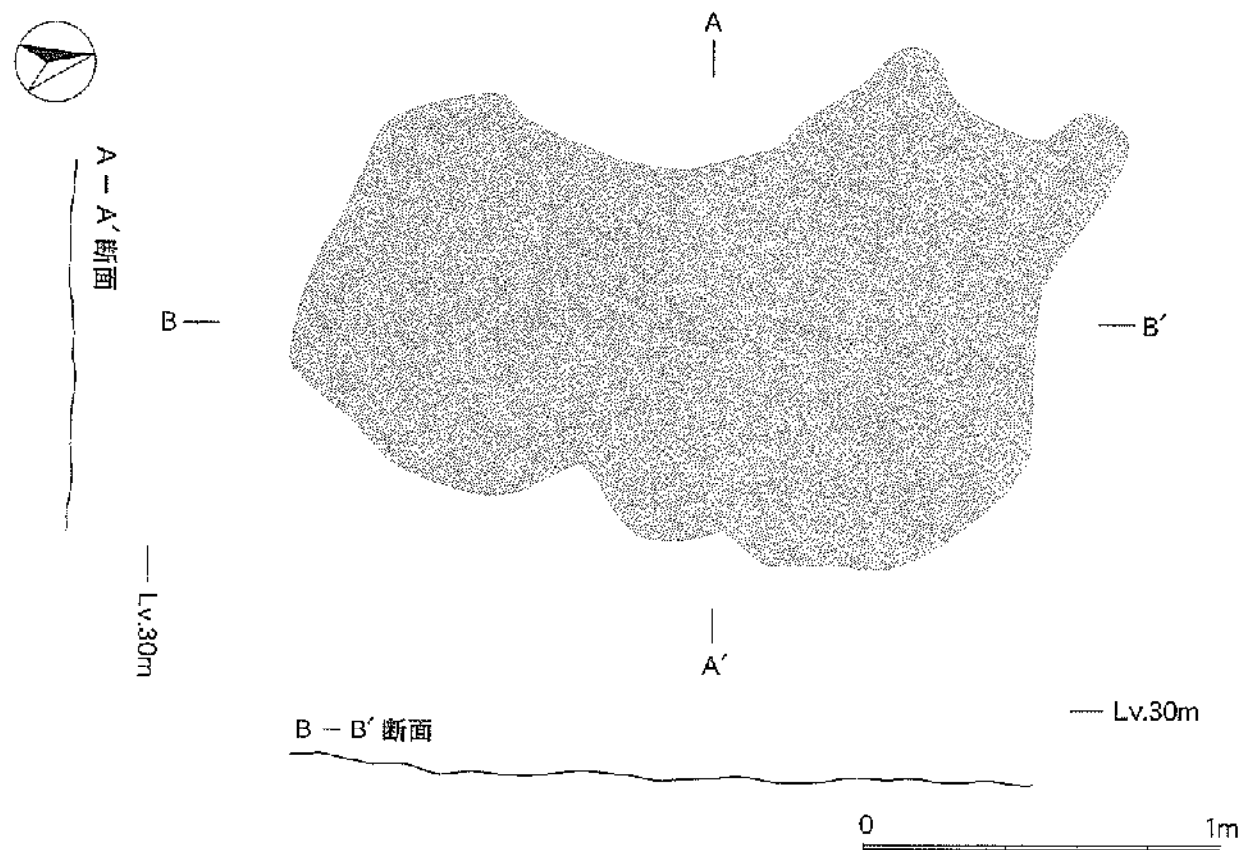
前述したように、起因事業を鑑み、発掘調査は最低限の範囲・方法で実施された。そのため、調査自体も土器溜りの調査のみに始終し、その他の遺構は検出していない。

この土器溜りは、約 50 m<sup>2</sup>に遺物が集中して出土するというものであり、特に掘り込み等は確認されなかった。また、遺物包含層も、埋蔵されていた土器の器高分、つまり約 10～30cm 程度であった。これらのことから、この土器溜りは、自然地形上にそのまま大量の土器を安置して形成されたと考えられる。

土器溜りを構成する土器は、いわゆる成川式に限られるため、土器溜りの形成時期も、成川式に伴う時期と考えられる。土器の出土状況は、限られた範囲から密集して出土しており、まさに足の踏み場も無いほどであった。完形もしくはそれに近いものが多数ふくまれており、中には 2～3 個の土器が入れ子状になったものもあった。

土器溜り下の自然地形については、基本的には平坦であるものの、調査区域が河川の隣接地であるため、若干の高低差がある。また、土器溜り周辺には、山頂部から流れ落ちてきたと思われる巨岩が数個あり、それらがある部分は石の重さで著しく凹んでいる。

このように、土器溜りが河川に隣接して形成されていること、土器溜りを形成する土器に完形のものが多いことなどから、この土器溜りが単に土器廃棄の結果として形成されたものではなく、何らかの祭祀に関連して形成されたものと考えられる。



第3図 土器溜り

### 第4節 出土遺物

西ノ原遺跡からは、第2節で記したように、成川式土器が検出された。

出土量は極めて多いが、土器溜りから検出されたものが全てである。単一土層からの出土であること、土器溜り状の出土が多いことなどから、時間的な差異に拠らず、形態や器種に主眼を置いて分類を試みた。明確な特徴が無く時代及び型式分類が困難な土器片については、土器少片として一括して取り扱い、点数と重量を測定するに留めた(第2表)。総点数 24,269 点、総重量 954,310 g を数える。不明品が多いが、器種分別ができたものについては、圧倒的に壺が多い。

第2表 西ノ原遺跡出土土器小片 点数・重量一覧

器種	部位	点数	重量 (g)	器種	部位	点数	重量 (g)
壺	口縁部	22	1,950	壺	口縁部	120	5,300
	口縁部 (突帯)	1,234	97,800		頸部	25	1,150
	胴部	430	47,350		頸部 (突帯)	19	1,260
	胴部 (突帯)	2,545	95,800		胴部	61	3,200
	底部	248	33,450		胴部 (突帯)	123	8,010
	脚部	553	95,200		底部	42	9,350
	計	5,032	371,550		計	390	28,270
鉢	口縁部	40	2,650	高杯	杯部 (口縁部)	162	5,200
	底部	365	53,600		杯部 (口縁部以外)	383	9,700
	計	405	56,250		脚部	55	10,650
				計	600	25,550	
埴	口縁部	44	900	ミニテニア	口縁部	10	100
	頸部	3	100		胴部	4	500
	胴部	44	1,430		底部		
	底部	13	1,700		その他	5	260
	計	104	4,130		計	19	860
その他不明品	口縁部	2,231	42,210				
	胴部	15,388	421,940				
	底部	80	2,750				
	その他	20	800				
	計	17,719	467,700				
				土器小片点数計			24,269
				土器小片重量計			954,310

## 1 成川式土器 (第4図1～第15図127)

成川式土器はまず器種ごとに大別し、その後特徴や残存部位等の属性により細別した。

### 甕形土器 (第4図1～第10図48)

広口で筒状の胴部を有し、脚台を持つ、いわゆる甕形土器の特徴を有するものを甕類とした。それぞれ形態や属性といった特徴ごとに細別を行った。出土状況の項でも述べたように、西ノ原遺跡出土のものは入れ子状に出土しているものもあり、サイズの異なる幾つかのグループに分類することが可能である。本稿では、口径25～30センチ前後のものを大型(1型)、口径15～20センチのものを中型(2型)、口径15センチ以下のものを小型(3型)と、3段階に分けて分類した。

#### 甕A a類 (第4図1～3)

甕形土器のうち、無文のものを甕A類とした。甕A類のうち、口縁部がゆるやかに外反するものを甕A a類とした。大きさによる分類によれば、1～3は大型(1型)に分類できる。

1は胴部が直立気味に立ち上がり、端部付近で一旦すぼみ、先端部が外反する器形を有する。器面調整は、内外面ともにハケメ状原体の工具による調整(いわゆるハケメ。以下ハケメと記述)が観察できる。脚台は底に向かい真っ直ぐに下り、端部が若干外反する形状で、内面天井部は若干盛り上がる。2は胴部が直立気味に立ち上がり、先端部が外反する器形を有する。脚台は低く、底に向かい真っ直ぐに下りる形状で、内面天井部は若干盛り上がる。器面調整は、内外面ともにハケメと、内面に指や工具等の原体でナデつける調整(いわゆるナデ。以下ナデと記述)と、指で押さえつける調整(いわゆる指おさえ。以下指おさえと記述)が観察できる。3は胴部が直線的に外傾して開き、先端部で僅かに外反する器形を有する。脚台は低く、底に向かい真っ直ぐに下りる形状で、内面天井部は平坦気味で、若干盛り上がる。器面調整は、内外面ともにハケメが観察できる。

#### 甕A b類 (第4図4～6)

甕A類のうち、口縁部が直立するものを甕b a類とした。大きさによる分類によれば、4～6は大型(1型)に分類できる。

4～6はいずれも完形である。4は若干長胴気味の器形を有する。脚台は底に向かい真っ直ぐに下りる形状で、内面天井部は若干盛り上がる。器面調整は、内外面ともにハケメと、脚台外面に指おさえが観察できる。5の脚台は底に向かい真っ直ぐに下りる形状で、内面天井部は平坦気味で、若干盛り上がる。器面調整は磨耗が激しく判然としないが、外面にハケメが観察できる。6は若干浅目の器形で、鉢状の外観を呈する。脚台は底に向かい真っ直ぐに下りる形状で、内面天井部は平坦気味で、若干盛り上がる。器面調整は、内外面ともにハケメが観察できる。

#### 甕A c類 (第6図7)

甕A類のうち、その他のものを甕A c類とした。

7は、胴部から脚台にかけて残存しているもので、くの字状に緩やかに外反する口縁部へと続くと考えられる。口縁部と胴部の境目には突帯を有しない。胴部中程に最大径を有する。器面調整は、内外面ともにハケメが観察できる。

#### 甕B a類 (第5図8・第6図9)

甕形土器の中で、1条の突帯を有し、口縁部がくの字状に緩やかに外反するものを甕B類とした。

甕B類のうち、口縁部と胴部の境目に、1条の突帯を有し、さらに刻目の内部に繊維圧痕が観察

できるものを甕B a類とした。大きさによる分類によれば、1, 2は大型(1型)に分類できる。

8は完形である。器面調整は、内外面ともに磨耗が激しく判然としないものの、底部外面に斜方向の、脚台の内外面に横位のハケメが観察できる。脚台は底に向かい真っ直ぐに下りる形状で、内面天井部は平坦気味で、若干盛り上がる。9も同様の器形を有するもので、口縁部から胴部にかけて残存している。器面調整は、口縁部の内外面に横位のハケメが、胴部内外面に縦位のハケメが観察できる。

#### 甕B b 1類 (第6図10・第5図11)

甕B類のうち、口縁部と胴部の境目に1条の刻目突帯を有するものを甕B b類とした。甕B b 1類は、口径25～30センチ前後のもの(大型)である。

10は口縁部から胴部にかけて残存している。口縁部はくの字状に緩く外反する。口縁部と胴部との境に1条の突帯を有する。突帯には、工具によると思われる細い刻目が施されている。器外面の調整は、口縁部及び突帯の上位と下位に横方向のハケメが観察できる。器内面の調整は、口縁部に横方向のハケメが観察できる。脚台の内面天井部は平坦気味で、若干盛り上がる。11は、ほぼ完形であるが、口縁部と脚台の端部がそれぞれ欠損している。口縁部と胴部との境には、1条の刻目突帯を有する。突帯には、工具によると思われる細い刻目が施されている。器内外面ともに、表面の磨耗が激しいため判然としないが、器外面にハケメが観察できる。脚台内面天井部は平坦気味で、若干盛り上がる。

#### 甕B b 2類 (第5図12・13)

甕B b 2類は、口径15～20センチのもの(中型)である。

12・13ともに完形で、口縁部が若干外反する(12の方が屈曲の度合いが強い)。いずれも、口縁部と胴部との境に1条の刻目突帯を有する。いずれの脚台も、底に向かい真っ直ぐに下りる形状で、内面天井部は平坦気味で、若干盛り上がる。器面調整はいずれも磨耗が激しいため判然としないが、器内外面ともにハケメが観察できる。

#### 甕B b 3類 (第5図14)

甕B b 3類は、口径15センチ以下のもの(小型)である。

14は完形で、口縁部と胴部との境に1条の刻目突帯を有する。脚台は底に向かい真っ直ぐに下りる形状で、内面天井部は平坦気味で、若干盛り上がる。器面調整は、内外面ともにハケメ・ナデが観察できる。

#### 甕B c 1類 (第6図15)

甕B類のうち、口縁部と胴部の境目に1条の断面台形突帯を有するものを甕B c類とした。甕B c 1類は、口径25～30センチ前後のもの(大型)である。

15は完形である。口縁部と胴部の境目に1条の断面台形突帯を有する。器面調整は、器内外面ともにハケメが観察できる。脚台は、底に向かい若干外反気味に開く形状で、内面天井部は平坦気味で、若干盛り上がる。

#### 甕B c 2類 (第5図16)

甕B c 2類は、口径15～20センチのもの(中型)である。

16は、口縁部から底部にかけて残存している。口縁部と胴部の境に断面台形突帯を1条有する。



器面調整は、外面にハケメ・ナデが、内面にハケメが観察できる。

#### 甕C 1類 (第7図17・18)

甕形土器の中で、口縁部が外側に開く形状のものを甕C類とした。いずれも1条の断面三角形突帯を有する。甕C 1類は、口径25～30センチ前後のもの(大型)である。

17は完形である。口縁部と胴部との境には、1条の断面三角形突帯を有する。器外面の調整は、ハケメが見られる。特に突帯の上位と下位はナデ調整の後丁寧にハケメが施されており、その結果断面形が若干凹んでいる。脚台は底に向かい真っ直ぐに下りる形状で、内面天井部は平坦気味で、若干盛り上がる。18は口縁部から胴部にかけて残存している。口縁端部が若干肥厚する。器面調整は、内外面ともに横位のハケメが観察できる。

#### 甕C 2類 (第6図19)

甕C 2類は、口径15～20センチのもの(中型)である。

19は完形で、口縁部と胴部との境に1条の断面三角形突帯を有する。脚台は底に向かい真っ直ぐに下りる形状で、内面天井部は平坦気味で、若干盛り上がる。器面調整は外面にハケメ・ナデが、内面にハケメが観察できる。

#### 甕D a 1類 (第8図20・第7図21)

甕形土器の中で、口縁部が直立し、若干内湾ぎみに立ち上がる口縁部を有するものを甕D類とした。甕D類のうち、口縁部と胴部の境に1条の刻目突帯を有するものを甕D a類とした。甕D a 1類は、口径25～30センチ前後のもの(大型)である。

20は完形である。突帯には、工具によると思われる細い刻目が施されている。最大径は突帯部である。器外面の調整は、口縁部と突帯下位に横方向のハケメが、胴部に縦位のナデが、底部と脚台の接合部に指おさえが、それぞれが観察できる。器内面の調整は、口縁部にハケメが、胴部には指おさえが観察できる。脚台は底に向かい真っ直ぐに下りる形状で、内面天井部は平坦気味で、若干盛り上がる。21は口縁部から胴部にかけて残存している。口縁部と胴部の境に突帯を1条有する。突帯には、工具によると思われる細い刻目が施されている。器内外面ともにハケメが観察できる。

#### 甕D a 2類 (第7図22)

甕D a 2類は、口径15～20センチのもの(中型)である。

22は完形で、口縁部と胴部との境に1条の刻目突帯を有する。脚台は底に向かい外反して下りる形状で、内面天井部は平坦気味で、若干盛り上がる。器面調整は内外面ともにハケメが観察できる。

#### 甕D a 3類 (第6図23)

甕D a 3類は、口径15センチ以下のもの(小型)である。

23は完形で、口縁部と胴部との境に1条の断面三角形突帯を有する。脚台は底に向かい真っ直ぐに下りる形状で、内面天井部は平坦気味で、若干盛り上がる。器面調整は内外面ともにハケメが観察できる。

#### 甕D b類 (第8図24・第9図25)

甕D類のうち、口縁部と胴部の境目に断面三角形突帯を有するものを甕D b類とした。大きさによる分類によれば、24・25は大型(1型)に分類できる。

24は完形である。口縁部と胴部の境に断面三角形突帯を1条有する。脚台は底に向かい真っ直

ぐに下りる形状で、内面天井部は平坦気味で、若干盛り上がる。器面調整は、口縁部内外面ともに指おさえが、外面突帯上位及び下位と、底部及び脚台にハケメが見られる。25は口縁部から胴部にかけて残存している。口縁部と胴部の境に断面三角形突帯を1条有する。器面調整は、口縁部と突帯下位にハケメが見られるほか、胴部下部にヘラ状工具によると考えられる研磨痕(いわゆるミガキ。以下ミガキと記述)が観察できる。内面にはハケメ及び指おさえが見られる。

#### 甕E類 (第10図26・第9図27・28)

甕形土器の中で、比較的短い口縁部が屈曲するものを甕E類とした。いずれも口縁部と胴部の境に1条の刻目突帯を有する。大きさによる分類によれば、26～28はいずれも大型(1型)に分類できる。

26は完形である。27・28と比して屈曲の度合いが強い。脚台は底に向かい真っ直ぐに下りる形状で、内面天井部は平坦気味で、若干盛り上がる。器面調整は、外面突帯の上位及び下位にハケメが、底部と脚台の接合部に指おさえが観察でき、内面にハケメが見られる。27は、口縁部から底部にかけて残存している。器面調整は、内外面ともにハケメが観察できる。28は、口縁部から胴部にかけて残存している。器面調整は、内外面ともにハケメが観察できる。

甕F類 (第8図33・35・36, 第9図34・37～39, 第10図29～31・40・42・48, 第11図32・41・43～47)

甕形土器の残存部と考えられるもので、底部及び脚台が残存しているものを一括して甕F類とした。いずれの形状も、多少の個体差はあるが、ほぼ次の特徴を示す。脚台は、底に向かい真っ直ぐに下りるか若干外反する形状で、内面天井部は平坦気味で、中央部が若干盛り上がる。底径は10cm前後のものが多い。器面調整は、内外面にハケメや指おさえが観察できるものが多い。

34・48の脚台は他のものと比して低い。或いは鉢に分類されるべきものである可能性もあるが、残存部が少ないことから、便宜上この分類とした。

#### 壺形土器 (第11図49～第13図70)

胴部上部で狭まり、頸部を持ついわゆる壺形土器の特徴を有するのを壺類とした。それぞれ形態や属性といった特徴ごとに細別を行った。甕形土器と同様、西ノ原遺跡出土のものは入れ子状に出土しているものもあり、サイズの幾つかのグループに分類することが可能である。本稿では、器高30センチ前後のものを大型(1型)、器高20センチ前後のものを中型(2型)、器高10センチ前後のものを小型(3型)と、3段階に分けて分類した。

#### 壺A a類 (第11図49)

壺形土器の中で、頸部に1条の突帯を有するものを壺A類とした。

壺A類の中で、頸部の1条突帯に刻目が施され、さらに刻目の内部には繊維圧痕が観察できるものを壺A a類とした。大きさによる分類によれば、49は大型(1型)に分類できる。

49は、口縁部から胴部上位にかけて残存している。頸部の突帯には、工具によると考えられる細い刻目が、斜位に密に施される。口縁部は若干湾曲気味に外反する。器面調整は、口縁部内外面ともにハケメが、頸部外面にミガキが観察できる。

#### 壺A b 1類 (第11図50)

壺A類の中で、頸部の1条突帯に刻目が施されるものを壺A b類とした。壺A b 1類は、器高

30センチ前後のもの（大型）である。

50は、口縁部から胴部上位にかけて残存している。頸部の突帯には、工具によると考えられる楕円形状の刻目が施される。口縁部は若干湾曲気味に外反する。器面調整は、内外面ともにハケメ・指おさえ等が観察できる。

#### 壺A b 3類（第11図51）

壺A b 3類は、器高10センチ前後のもの（小型）である。

51は完形である。口縁部は若干湾曲気味に外反する。頸部の突帯には、工具によると考えられる細かい刻目が施されている。底部は丸底である。器面調整は、内外面ともにハケメが観察できる。

#### 壺A c類（第11図52）

壺A類の中で、頸部の1条突帯に、工具によると考えられる細い沈線が施されるものを壺A c類とした。

大きさによる分類によれば、52は大型（1型）に分類できる。

52は、口縁部が欠損している。頸部の突帯には、工具によると考えられる細い沈線が、X字上に交互に廻る。胴部最大径はやや上位に位置し、肩が張る形状を有する。底部は丸底である。器面調整は、磨耗が激しく判然としないものの、内外面ともにナデが観察できる。

#### 壺B a 1類（第12図53）

壺形土器の中で、胴部に1条の突帯を有するものを壺B類とした。

壺B類の中で、胴部の1条突帯に刻目が施されるものを壺B a類とした。壺B a 1類は、器高30センチ前後のもの（大型）である。

53は頸部が欠損している。胴部最大径はやや上位に位置し、肩が張る形状を有する。この胴部最大径に突帯を有する。突帯には、工具によると考えられる細かい刻目が施されている。底部は若干上げ底気味になっている。器面調整は、外面にハケメが観察できる。

#### 壺B a 2類（第12図54）

壺B a 2類は、器高20センチ前後のもの（中型）である。

54は完形である。胴部最大径がやや上位に位置し、肩が張る形状を有し、胴部最大径部に突帯を有する。突帯には、工具によると考えられる細かい刻目が密に施されている。底部は丸底である。器面調整は、外面にミガキが観察できる。器壁も薄く、全体的に精緻な作りである。

#### 壺B a 3類（第12図55・58、第11図56・57）

壺B a 3類は、器高10センチ前後のもの（小型）である。

55～58は、いずれも完形である。55は、胴部中央よりやや上位に最大径を有し、この部分に1条の刻目突帯を有する。突帯には、工具によると考えられる細かい刻目が密に施されている。口縁部は若干湾曲気味に外反する。底部は丸底である。器面調整は外面にハケメが観察できる。56は55と同様若干肩が張り、胴部最大径に1条の刻目突帯が施される。突帯には工具によると考えられる細かい刻目が密に施される。口縁部は直立し、外傾して開く。底部は平底である。底部は丸底である。器面調整は、外面にハケメが観察できる。57・58は、胴部から底部にかけて残存している。いずれも胴部は球状で、胴部最大径に1条の刻目突帯を有する。突帯には工具によると考えられる細かい刻目が施されている。底部は平底である。器面調整は、磨耗が激しいため判然としな

いが、内外面ともにハケメが観察できる。

#### 壺B b類（第12図59）

壺B類の中で、胴部の1条突帯に、工具によると考えられる細い沈線が施されるものを壺B b類とした。大きさによる分類によれば、59は器高20センチ前後のもの（中型）に分類できる。

59は完形である。胴部の突帯には、工具によると考えられる細い沈線が、X字上に交互に廻る。突帯は胴部最大径に位置する。底部は丸底である。器面調整は、磨耗が激しく判然としないものの、内外面ともにハケメが観察できる。

#### 壺B c類（第12図60）

壺B類の中で、胴部に1条の断面三角形突帯を有するものを壺B c類とした。大きさによる分類によれば、60は器高10センチ前後のもの（小型）に分類できる。

60は完形である。胴部に1条の断面三角形突帯を有する。突帯は胴部最大径に位置する。底部は平底である。器面調整は、内外面ともにハケメが観察できる。

#### 壺C 1類（第12図61）

壺形土器の中で、単口縁で無文のものを壺C類とした。底部は平底・丸底あるが、いずれも若干尖り気味の器形で、安定感は頗る悪い。

壺C 1類は、器高30センチ前後のもの（大型）である。

61は、口縁部が欠損している。器面調整は、外面にハケメが、内面にナデが観察できる。底部は少し尖り気味の丸底である。

#### 壺C 2類（第12図62～64、第13図65）

壺C 2類は、器高20センチ前後のもの（中型）である。

62は外傾して開く口縁部を有し、底部は平底である。器面調整は内外面ともにハケメが観察できる。63も62と同様、外傾して開く口縁部を有し、底部は平底である。器面調整は外面にハケメが、内面に指ナデが観察できる。64は口縁部が欠損している。底部は若干膨らみ気味の平底である。器面調整は、外面にハケメが観察できる。65は若干外反して開く口縁部を有し、底部は平底である。

#### 壺C 3類（第12図66・67）

壺C 3類は、器高10センチ前後のもの（小型）である。

66・67は、いずれも完形である。66は外傾して開く口縁部を有し、底部は平底である。器面調整は内外面ともにハケメが観察できる。67も外傾して開く口縁部を有し、底部は平底である。器面調整は内外面ともにハケメが観察できる。

#### 壺D類（第13図68・69）

壺形土器の中で、頸部が短い、いわゆる短頸壺と呼ばれる器形のものを壺D類とした。

68は、長胴気味の胴部を有する。底部は平底である。器面調整は、外面にハケメが観察できる。69は、やや球状気味の胴部を有する。底部は丸底である。器面調整は、内外面ともにハケメが観察できる。

#### 壺E類（第13図70）

壺形土器の中で、底部のみが残存しているものを壺E類とした。

70は、中型の壺形土器と考えられるものである。胴部から底部にかけて残存している。底部は



平底である。器面調整は、内外面ともにハケメが観察できる。

#### 高杯形土器 (第13図71～第13図77)

杯部と脚台を有する、いわゆる高杯形土器の特徴を有するのを高杯類とした。甕や壺と同様、サイズの差はあると考えられるものの、その差異はあまり明確なものではない。それぞれ形態や属性といった特徴ごとに細別を行った。

#### 高杯A1類 (第13図71・72)

高杯形土器のうち、杯部が椀状を呈し、外面に段を有するものを高杯A類とした。高杯A1類は口径20センチ前後のものである。

71は完形である。杯部は若干丸みを帯びる。脚部はスカート状に湾曲して開く。器面調整は、内外面ともにミガキが観察できる。72は杯部底部から脚部にかけて残存しているものである。脚部はスカート状に湾曲して開く。丹塗のものである。器面調整は、内外面ともにミガキが観察できる。また、脚部内面にはハケメが観察できる。

#### 高杯A2類 (第13図73)

高杯A2類は口径15センチ前後のものである。

73は、杯部と脚部の上部が残存しているものである。器面調整は、内外面ともにミガキが観察できる。

#### 高杯B類 (第13図74)

高杯A類と同様、椀状の杯部を有するが、口縁部端が外反する器形を有するものを、高杯B類とした。

74は完形である。脚部はスカート状に湾曲して開く。杯部屈曲部と、口縁部の屈曲部には、稜線を呈する。器面調整は、内外面ともにミガキが観察できる。

#### 高杯C類 (第13図75・76)

高杯形土器のうち、椀状の口縁部で、無文で屈曲しないものを高杯C類とした。

75・76はいずれも杯部のみが残存している。75の器面調整は、外面にミガキが、内面にハケメが観察できる。丹塗のものである。76は75と比して杯部が浅い。器面調整は、外面にハケメとナデが、内面にハケメが観察できる。

#### 高杯D類 (第13図77)

高杯形土器のうち、脚部のみが残存しているものを高杯D類とした。

77は、スカート状に湾曲して開く脚部である。器面調整は、外面にミガキが、内面にハケメとナデが観察できる。

#### 鉢形土器 (第13図78～第14図91)

いわゆる鉢形土器の特徴を有するのを鉢類とした。高杯と同様、サイズの差はあると考えられるものの、その差異はあまり明確なものではない。それぞれ形態や属性といった特徴ごとに細別を行った。

#### 鉢A1類 (第13図78)

鉢形土器のうち、脚台を有し、杯部が外反する器形のもを鉢A類とした。鉢A1類は口径20センチ前後のものである。

78は完形である。杯部が大きく外傾して直線的に外へ開き、端部で外反する器形を有する。脚

台は底に向かい直線的に下り、端部で外反する形状で、内面天井部は平坦気味で、若干盛り上がる。器面調整は、内外面ともにハケメ・ナデが観察できる。

#### 鉢A2類 (第13図79)

鉢A2類は口径15センチ前後のものである。

79は完形である。杯部が大きく外傾して直線的に外へ開き、端部で外反する器形を有する。口縁部端部の粘土貼付部分は、仕上げが粗雑であるため、外面に貼付線となって残存している。口径と比して器高が低く、浅い。脚台は低い。底に向かい直線的に下り、端部で外反する形状である。内面天井部は平坦気味で、若干盛り上がる。器面調整は、外面にハケメ・ナデが、内面にハケメが観察できる。

#### 鉢B1類 (第14図80・81, 第13図82)

鉢形土器のうち、脚台を有し、杯部が直立するものを鉢B類とした。鉢B1類は口径20センチ前後のものである。

80は完形である。杯部は内湾気味に立ち上がる器形を有する。脚台は外反する。内面天井部は平坦気味で、若干盛り上がる。器面調整は、内外面ともにハケメが観察できる。81は完形である。杯部は内湾気味に立ち上がる器形を有し、深い。脚台は低い。底に向かい直線的に下り、内面天井部は若干盛り上がる。器面調整は、外面にハケメ・指おさえが観察できる。82は完形である。杯部は大きく外傾して、端部で直立して立ち上がる。脚台は低い。底に向かい直線的に下り、内面天井部は平坦気味で、若干盛り上がる。器面調整は、内外面ともにハケメ・ナデ・指おさえが観察できる。

#### 鉢B2類 (第14図83)

鉢B2類は口径15センチ前後のものである。

83は完形である。杯部は内湾気味に立ち上がる器形を有し、やや深い。脚台は底に向かい直線的に下り、内面天井部は平坦気味で、若干盛り上がる。器面調整は、外面に鉢・ナデ・指おさえが、内面にハケメが観察できる。

#### 鉢C1a類 (第14図84)

鉢形土器のうち、平底または丸底で、深めのもので、さらに口縁部が内湾気味に立ち上がるものを鉢C類とした。鉢C1類は口径20センチ前後のものである。

84は完形である。杯部は内湾気味に立ち上がる。底部は丸底気味の平底である。器面調整は、外面にハケメが、内面にハケメ・指おさえが観察できる。

#### 鉢C2類 (第14図85)

鉢C2類は口径15センチ前後のものである。

85は完形である。杯部は内湾気味に立ち上がり、端部は直立する。底部は平底である。器面調整は、表面の磨耗が激しいため判然としないが、外面にナデが、内面にハケメが観察できる。

#### 鉢C3類 (第14図86・87)

鉢C3類は口径10センチ前後のものである。

86は完形である。杯部は内湾気味に立ち上がる。底部は丸底である。器面調整は、外面にハケメ・ナデが、内面にハケメが観察できる。87も完形である。杯部は内湾気味に立ち上がる。底部は丸

底である。丹塗である。器面調整は、表面の磨耗が激しいため判然としないが、内外面ともにミガキが観察できるほか、内面にハケメが観察できる。

#### 鉢D類 (第14図88)

鉢C類と同様、平底または丸底で、深めのものであるが、口縁端部が外反するものを鉢D類とした。88は完形である。杯部は内湾気味に立ち上がり、端部で外反する。底部は丸底である。器面調整は、内外面ともにハケメが観察できる。

#### 鉢E類 (第14図89)

鉢形土器のうち、平底または丸底で、浅めのを鉢E類とした。

89は、杯部は外傾して大きく開く。底部は平底である。器面調整は、外面にハケメが、内面にナデが観察できる。

#### 鉢F類 (第14図90・91)

鉢形土器のうち、底部周辺が残存しているものを鉢F類とした。残存部位が少ないため、或いは壺の底部に分類されるべきものが含まれる可能性がある。

90は平底である。器面調整は、表面の磨耗が激しいため判然としないが、内面にハケメが観察できる。91も平底である。器面調整は、内外面ともにハケメが観察できる。

#### 埴土器 (第14図92～第15図104)

いわゆる埴形土器の特徴を有するのを埴類とした。それぞれ形態や属性といった特徴ごとに細別を行った。

#### 埴A類 (第14図92)

埴形土器のうち、細口で長頸のものを埴A類とした。

92は完形である。胴部は球胴状で、最大径よりやや上位に1条の断面台形突帯が廻る。表面の磨耗が激しく判然としないため、図化はできなかったが、良く観察すると、突帯に非常に細かい刻目が施されているのが目視できる。口縁部は外反する。表面は丁寧に研磨されており、黒色を呈する。

#### 埴Ba類 (第14図93)

埴形土器のうち、直線的に開く口縁部に球胴状の胴部を持ち、口縁部と胴部の高さがほぼ同じものを埴B類とした。そのうち、口縁部が若干内湾気味に開き、胴部最大径より口径の方が大きいものを埴Ba類とした。

93は完形である。胴部は球胴状で、最大径部は屈曲し、稜線が廻る。平底である。器面調整は、表面の磨耗が激しいため判然としないが、外面にミガキが観察できる他、内外面ともにハケメが観察できる。

#### 埴Bb類 (第15図94)

埴B類のうち、胴部最大径と口径がほぼ同じものを埴Bb類とした。

94は完形である。胴部はやや下膨れの形状で、丸底である。口縁部は内湾する。器面調整は、表面の磨耗が激しいため判然としないが、外面にミガキが観察できる他、内面にハケメが観察できる。

#### 埴Bc類 (第15図95～97)

埴B類のうち、胴部最大径が口径より大きいものを埴Bc類とした。

95は完形である。胴部は球胴状で、平底である。口縁部は内湾気味に立ち上がる。器面調整は、

表面の磨耗が激しいため判然としないが、外面にミガキが観察できる。96も完形である。胴部は球胴状で、平底である。口縁部は内湾する。器面調整は、表面の磨耗が激しいため判然としないが、外面にミガキ・ハケメが、内面にハケメが観察できる。97も完形である。胴部は球胴状で、丸底気味の平底である。口縁部は内湾する。器面調整は、外面にミガキ・ハケメが、内面にハケメが観察できる。

#### 埴Bd類 (第15図98)

埴B類のうち、胴部のみが残存しているものを埴Bd類とした。

82は球胴状の胴部で、平底である。器面調整は、表面の磨耗が激しいため判然としないが、外面にミガキが観察できる。

#### 埴C類 (第15図99)

埴形土器のうち、胴部最大径が底部付近にあり、口縁部は短く外反するものを埴C類とした。

98は完形である。胴部は下膨れの球胴状で、平底である。器面調整は、表面の磨耗が激しいため判然としないが、内外面ともに指おさえが観察できる。

#### 埴D類 (第15図100)

埴B類と類似するが、大きいものを埴D類とした。

100は口縁部が欠損し、胴部が残存しているものである。胴部は最大径部で大きく屈曲し、屈曲部には稜線が廻る。底部は平底である。器面調整は、外面は丁寧なミガキが、内面にナデが観察できる。丹塗である。

#### 埴Ea類 (第15図101)

穿孔が施されているものを、埴E類とした。その中で、口縁部が小さく、肩部に穿孔を有するものを埴Ea類とした。

101は底部が欠損している。胴部は最大径部で大きく屈曲し、屈曲部には稜線が廻る。口縁部と胴部との境は明確でなく、口縁部は大きく外反する。口縁端部に1条の沈線が廻る。器面調整は、外面は丁寧なミガキが、内面にハケメが観察できる。

#### 埴Eb類 (第15図102)

埴E類の中で、口縁部が広く開くものを埴Eb類とした。

102は完形である。胴部は球胴状で、平底である。最大径よりやや上位に穿孔を有する。口縁部と胴部との境には稜線が廻る。頸部は外反気味に開く。頸部と口縁部との境は大きく屈曲し、屈曲部にも稜線が廻る。口縁部は外反して開く。器面調整は、内外面ともに丁寧なミガキが観察できる。丹塗である。

#### 埴Ec類 (第15図103)

埴E類の中で、胴部のみが残存しているものを埴Ec類とした。

103は口縁部が欠損し、胴部が残存している。胴部は最大径付近で大きく屈曲し、屈曲部には稜線が廻る。屈曲部よりやや上位に穿孔を有する。底部は平底である。器面調整は、外面に丁寧なミガキが観察できる。

#### 埴F類 (第15図104)

その他不明品を、埴F類とした。



104は口縁部が欠損し、胴部が残存している。胴部は球胴状で、丸底である。器壁は厚く、全体的に作りが雑多な印象を受け、あるいは他の器種に分類すべき可能性も有る。重量も重い。器面調整は、内外面ともにハケメ・指おさえが観察できる。

ミニチュア土器 (第15図105～127)

小型のもので、手捏とも呼ばれるいわゆるミニチュア土器をこの分類とした。それぞれ形態や属性といった特徴ごとに細別を行った。

ミニチュアAa類 (第15図105・106)

ミニチュア土器のうち、上げ底状のものをミニチュアA類とした。そのうち、口縁部が外傾して直線的に立ち上がるものを、ミニチュアAa類とした。

105は完形である。底部は上げ底状で、脚台状を呈する。器面調整は、外面にハケメと指おさえが観察できる。106も完形である。器面調整は、外面にハケメと指おさえが、内面にナデが観察できる。

ミニチュアAb類 (第15図107・108)

ミニチュアA類のうち、口縁部が内湾気味に立ち上がるものを、ミニチュアAb類とした。

107は完形である。底部は上げ底状で、脚台状を呈する。器面調整は、内外面ともに指おさえが観察できる。108は口径が小さく、コップ状の外観を呈する。器面調整は、外面にナデと指おさえが観察できる。

ミニチュアAc類 (第15図109)

ミニチュアA類のうち、残存部位が少なく、詳細不明のものをミニチュアAc類とした。

109は、口縁部が欠損している。底部は上げ底状で、脚台状を呈する。器面調整は、外面にハケメ・指おさえが、内面に指おさえが観察できる。

ミニチュアBa類 (第15図110・111)

ミニチュア土器のうち、平底または丸底のものをミニチュアB類とした。そのうち、口縁部が外反するものを、ミニチュアBa類とした。

110は完形で、平底である。器面調整は、内外面ともにハケメが観察できる。111も完形で、丸底である。器面調整は、外面に指おさえが観察できる。

ミニチュアBb類 (第15図112・113)

ミニチュアB類のうち、口縁部が外傾して直線的に立ち上がるものを、ミニチュアBb類とした。

112は完形で、平底である。113も完形で、平底である。他のものと比して、厚手で重量も重い。器面調整は、外面にハケメと指おさえが、内面に指おさえが観察できる。

ミニチュアBc類 (第15図114～126)

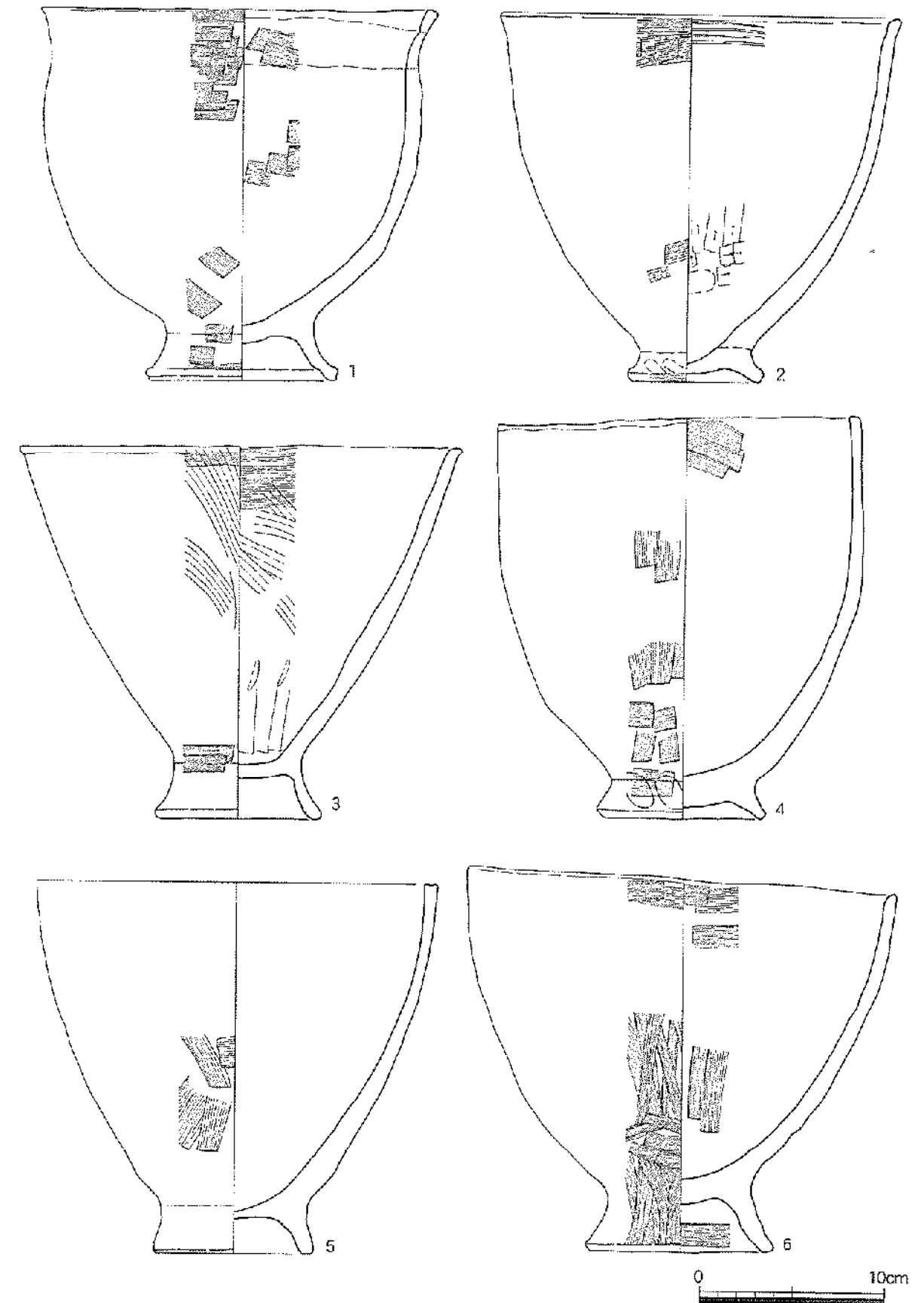
ミニチュアB類のうち、口縁部が内湾気味に立ち上がるものを、ミニチュアBc類とした。

殆どのものが平底である。器面調整は、内外面ともに指おさえが観察できるものが多い。全体的に雑多な作りであるが、114のように外面が丁寧に研磨されたものもある。

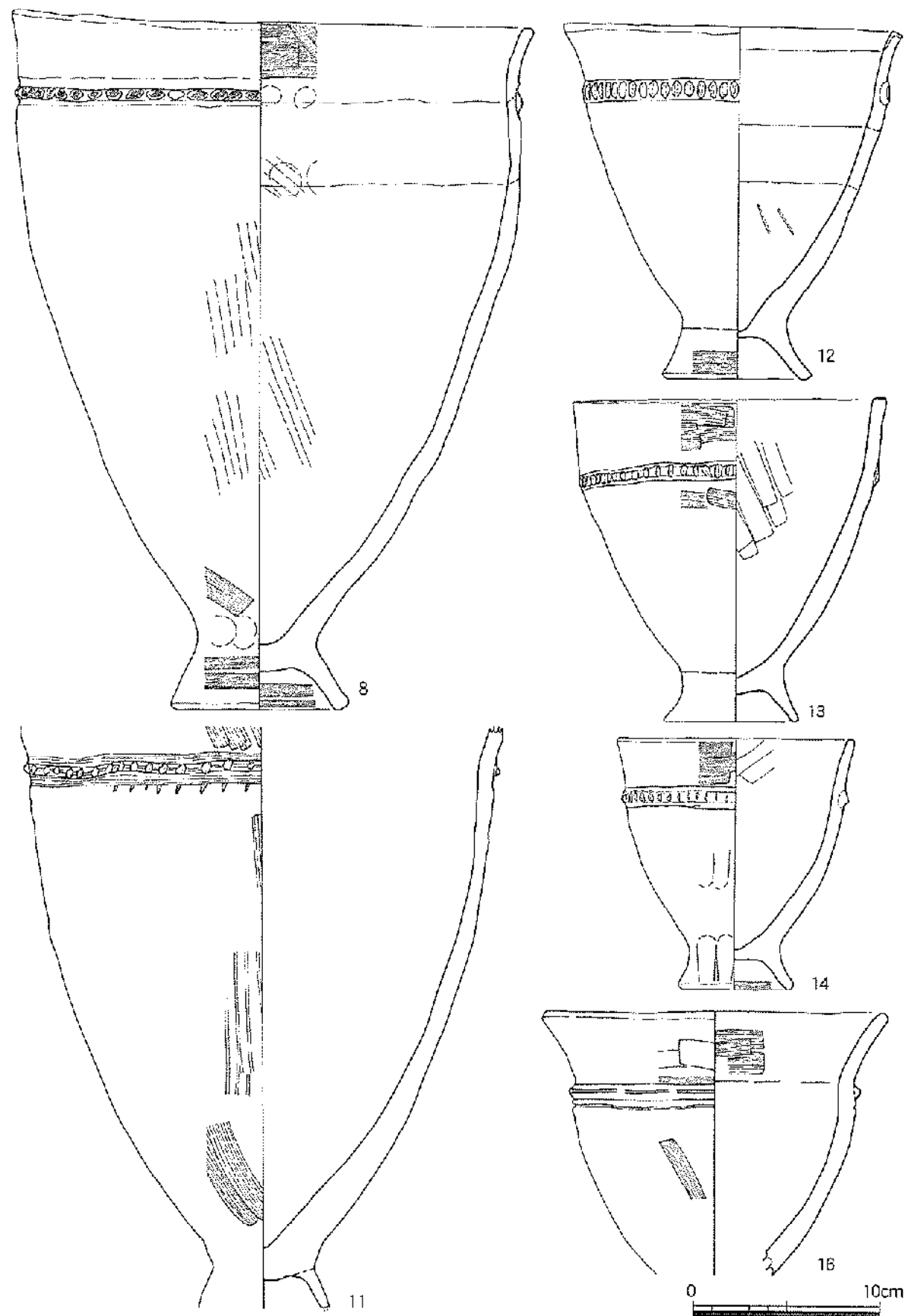
ミニチュアBd類 (第15図127)

ミニチュアB類のうち、浅く椀状の外観を呈するものをミニチュアBd類とした。

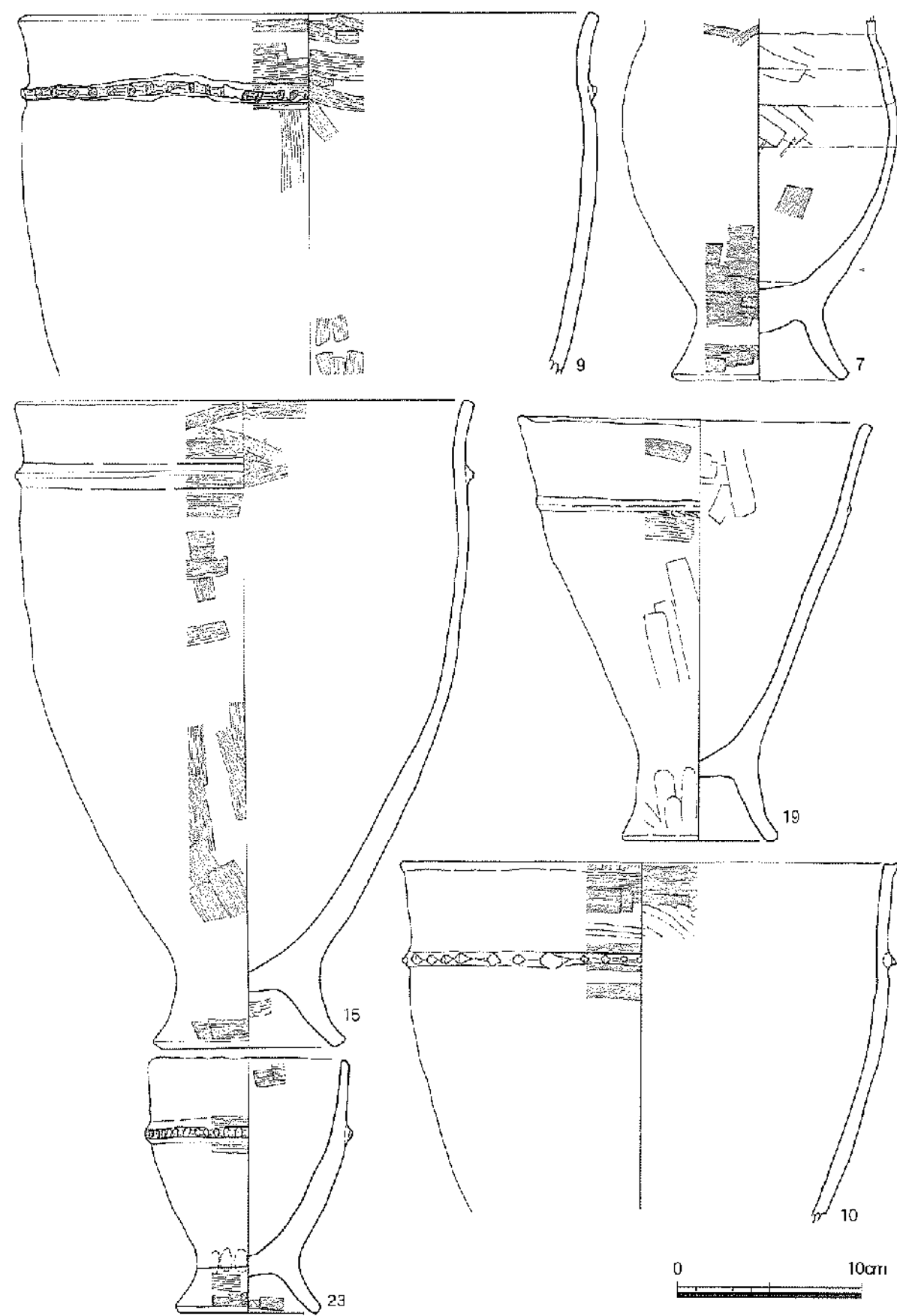
127は完形である。口縁部は内湾する。器面調整は、内外面ともに指おさえが観察できる。



第4図 西ノ原遺跡出土土器(1)

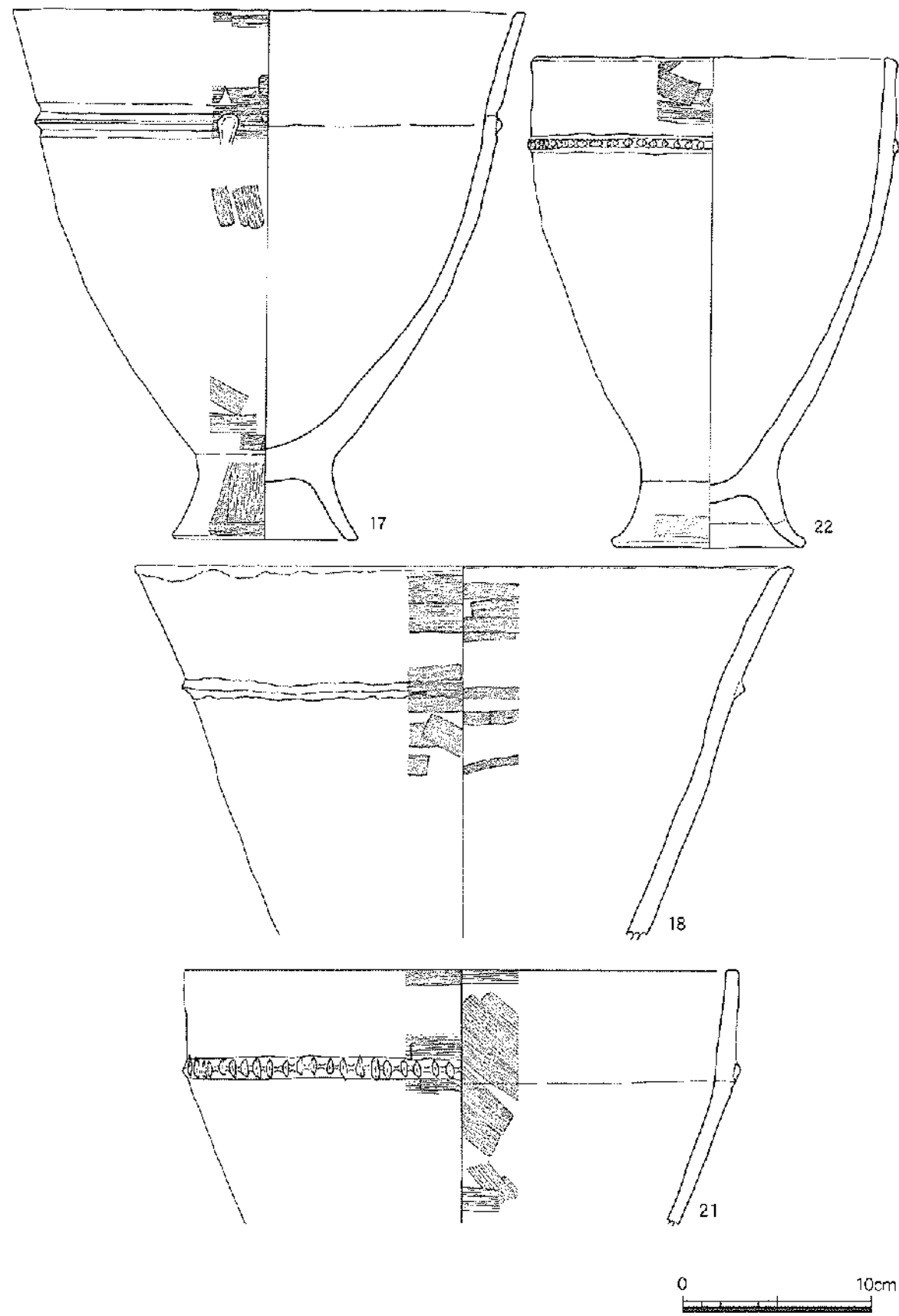


第5図 西ノ原遺跡出土土器(2)

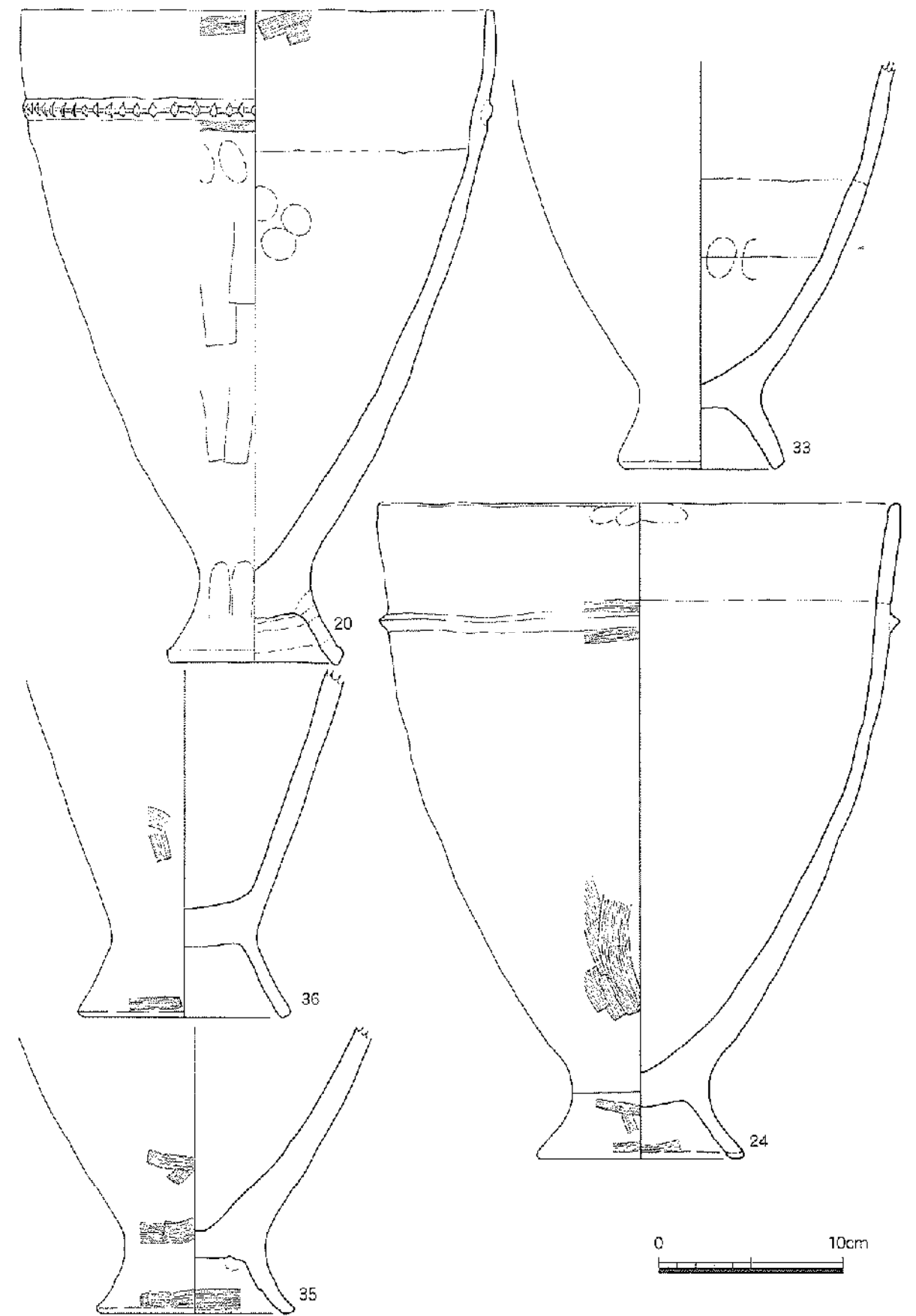


第6図 西ノ原遺跡出土土器(3)

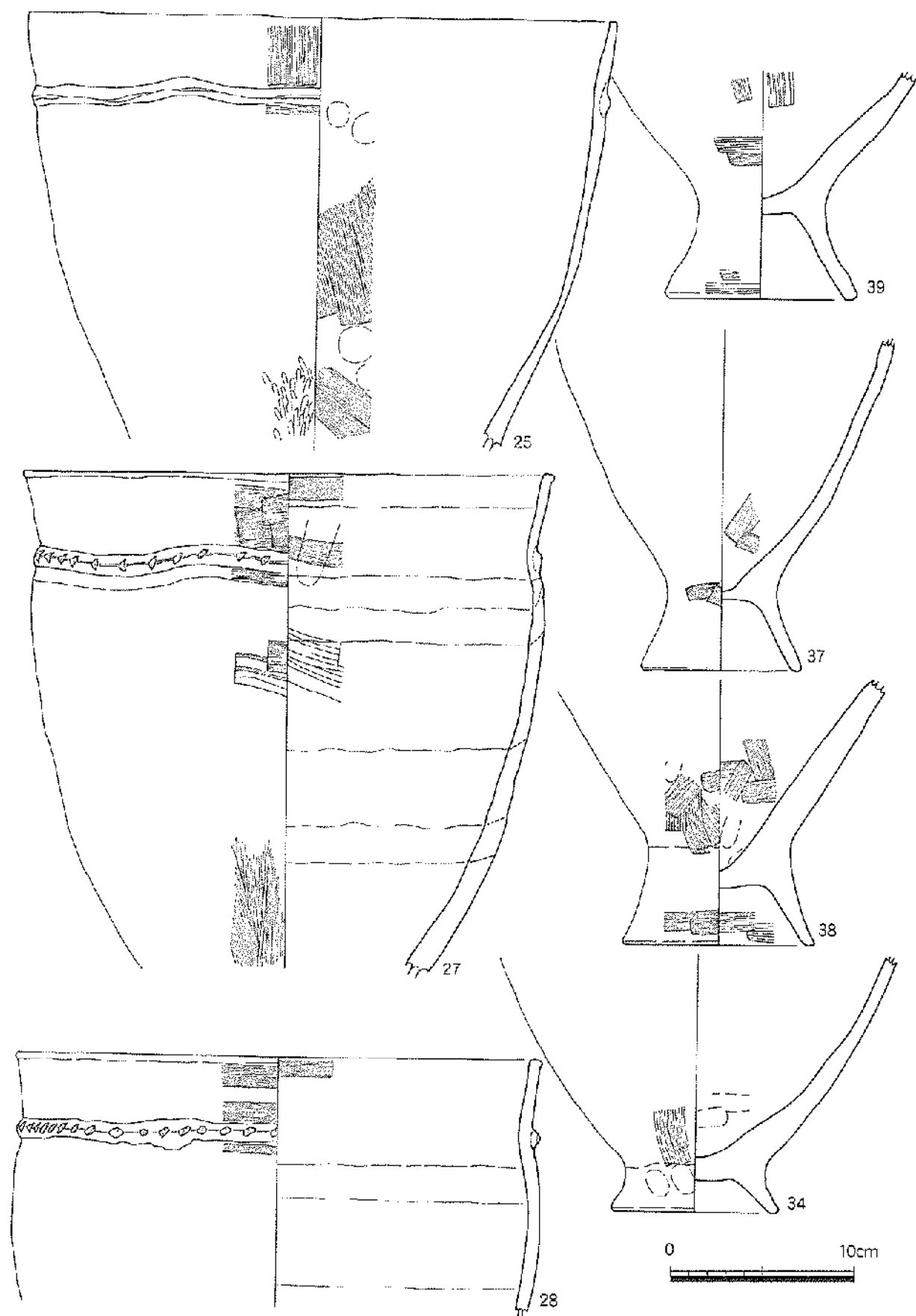




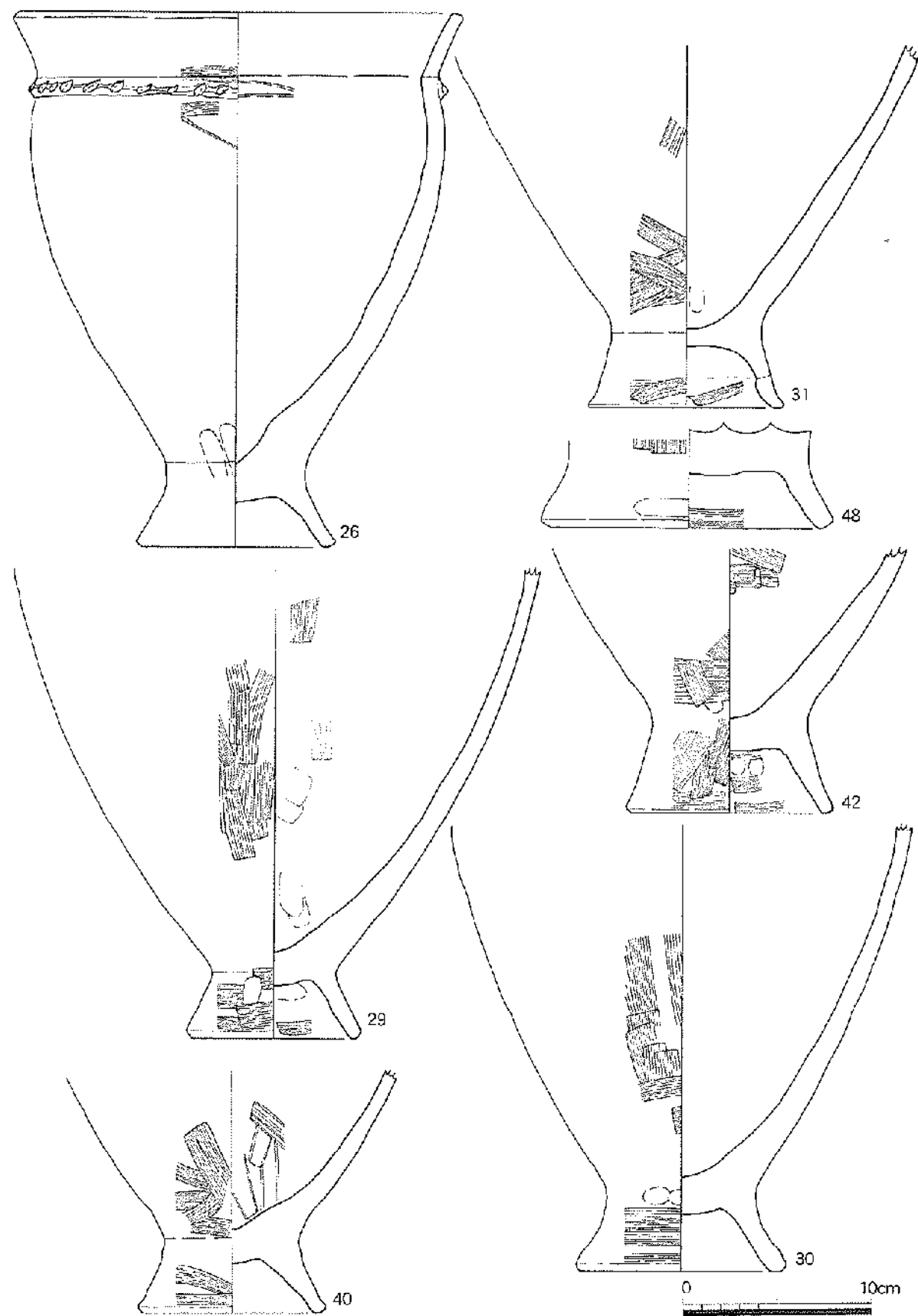
第7図 西ノ原遺跡出土土器(4)



第8図 西ノ原遺跡出土土器(5)

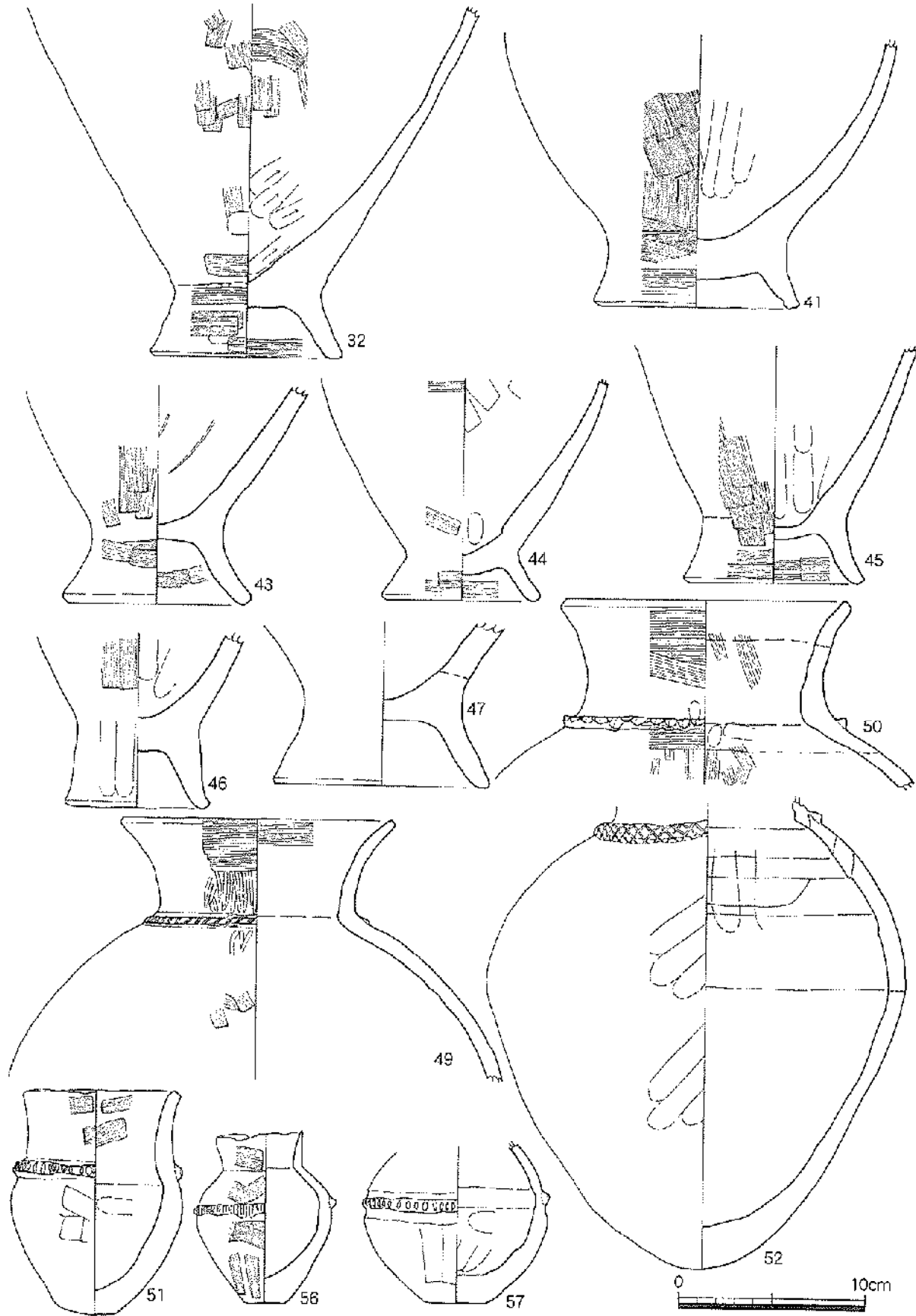


第9図 西ノ原遺跡出土土器(6)

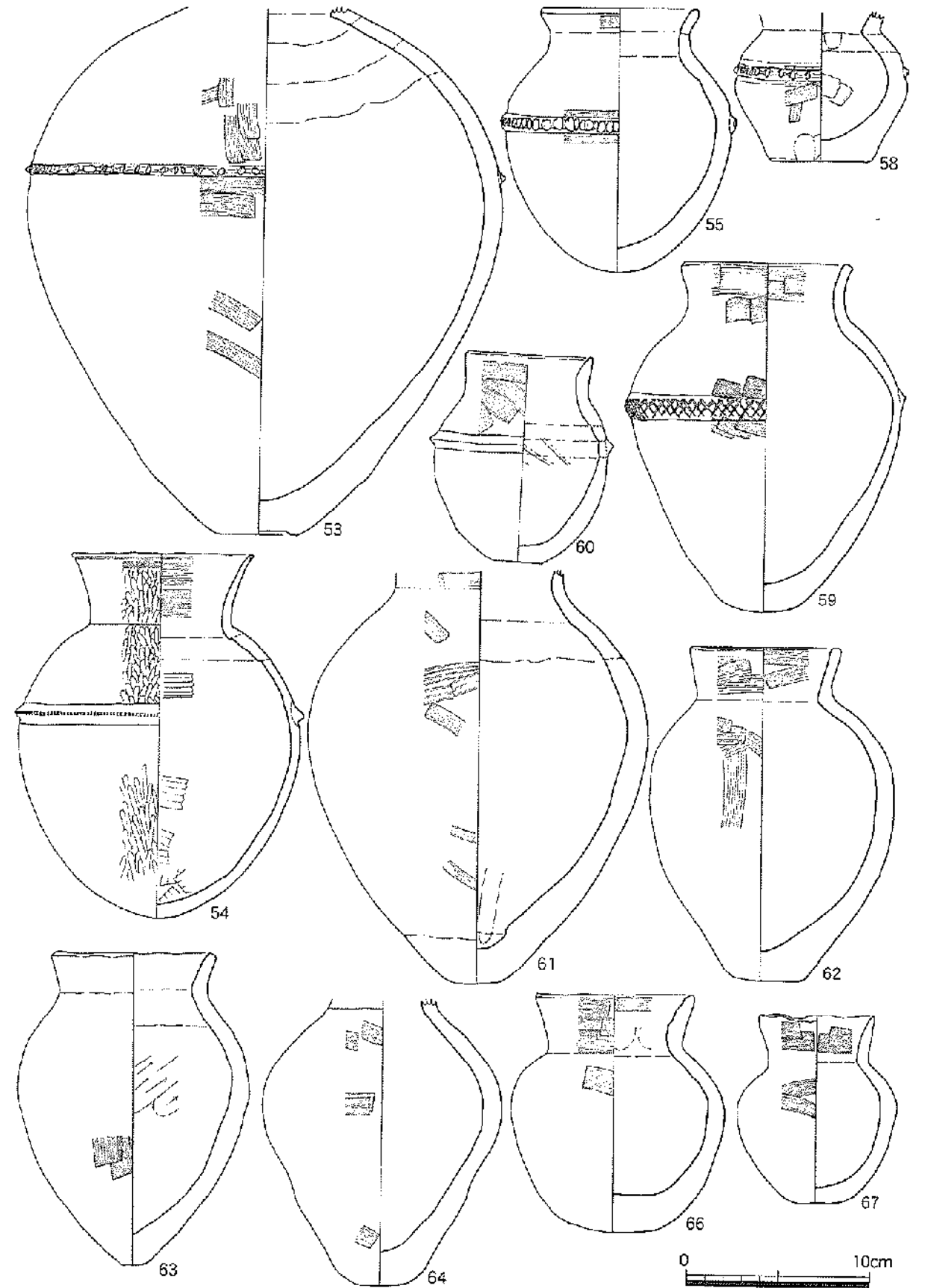


第10図 西ノ原遺跡出土土器(7)

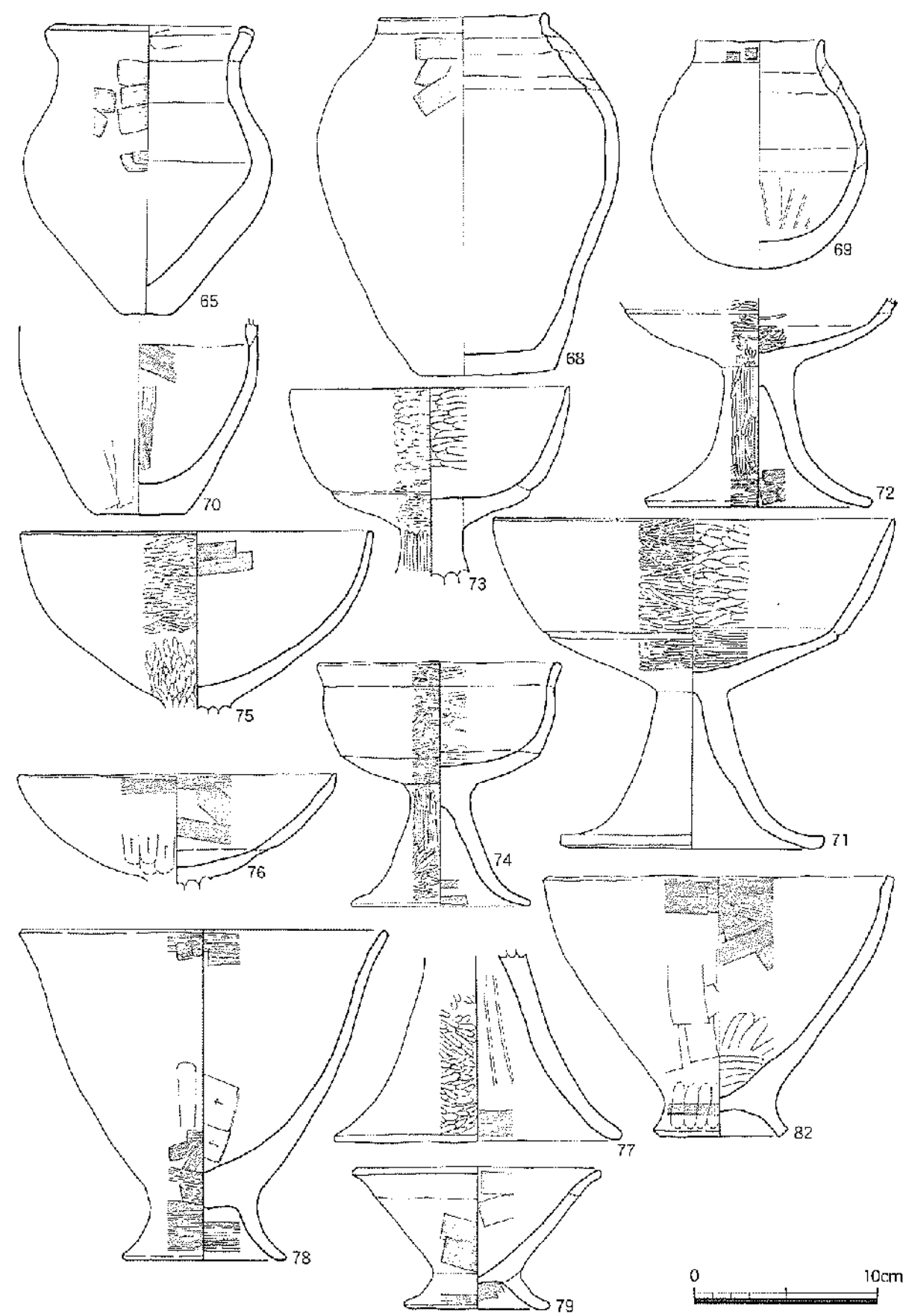




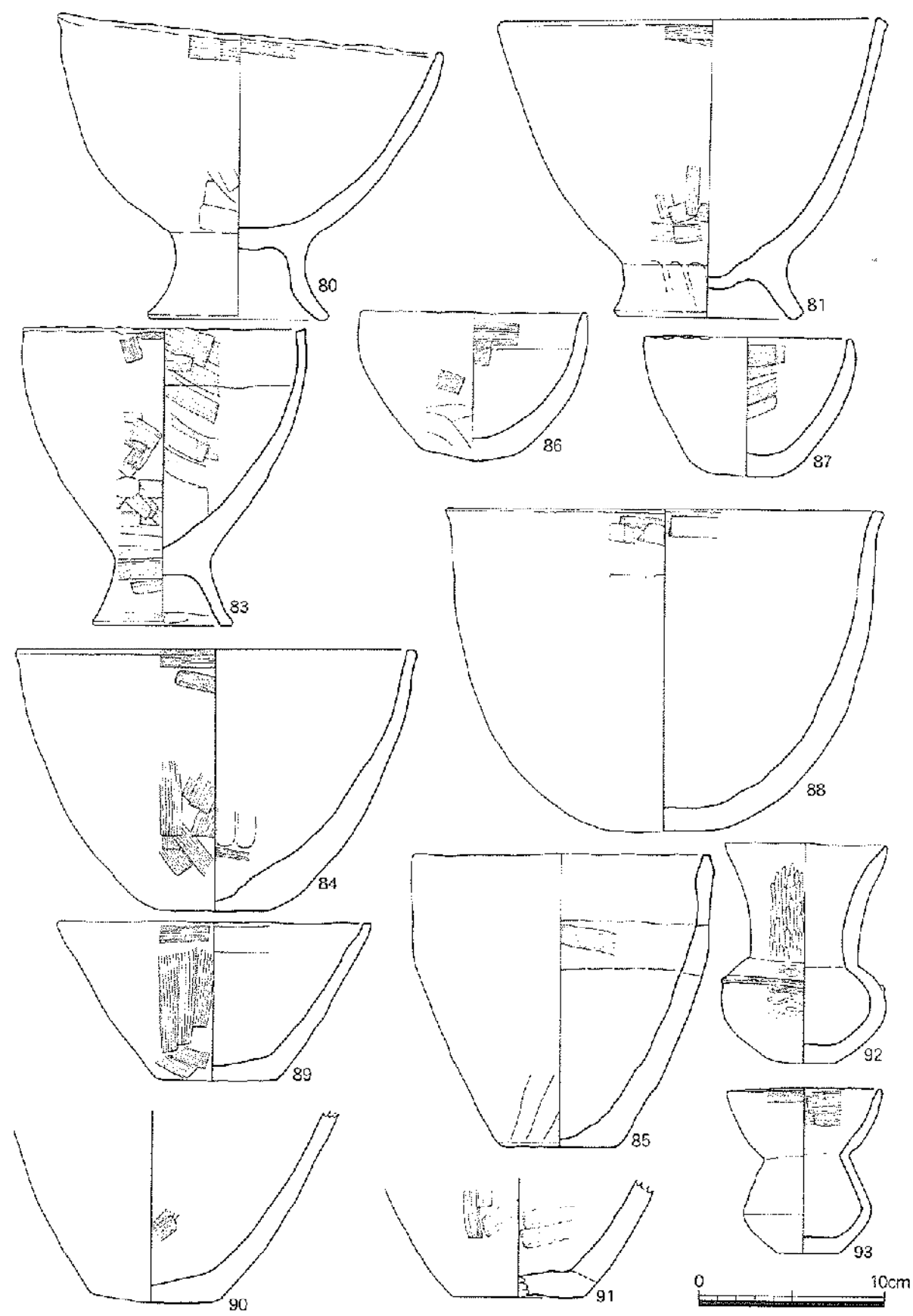
第 11 図 西ノ原遺跡出土土器(8)



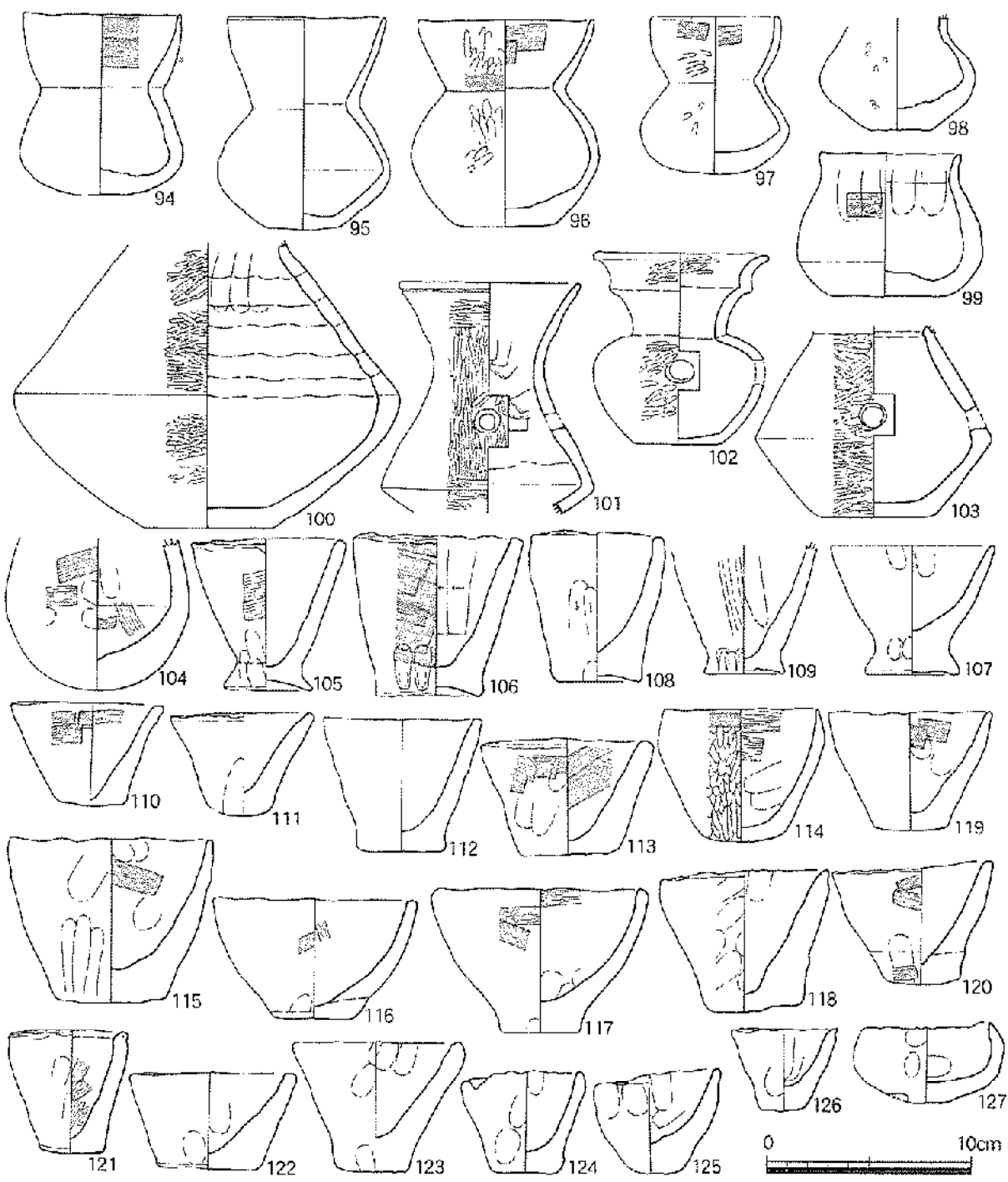
第 12 図 西ノ原遺跡出土土器(9)



第 13 図 西ノ原遺跡出土土器(10)



第 14 図 西ノ原遺跡出土土器(11)



第15図 西ノ原遺跡出土土器(12)

第3表 西ノ原遺跡包含層出土遺物観察表(1)

※胎土のS・C・K・R・U・SはそれぞれS=石英, C=長石, K=角閃石, R=小石, U=雲母を指す。  
※表中の径については, 完形でないものは, 復元径である。

採掘 番号	遺物 番号	層	器種	部位	胎土	色		器面調整		焼成	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考
						外	内	外	内					
4	1	Ⅲb	甕	完形	S・C・K	10YR7/2にぶい黄橙	10YR7/6明黄橙	ハケメ	ハケメ	良	21.5	10.2	20	
4	2	Ⅲb	甕	完形	S・C・K	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	ハケメ	ハケメ・ナデ・指押さえ	良	20.4	7	19.8	
4	3	Ⅲb	甕	完形	S・C・K	7.5YR6/6橙	7.5YR6/4にぶい橙	ハケメ	ハケメ	良	24	8.6	20	

第4表 西ノ原遺跡包含層出土遺物観察表(2)

※胎土のS・C・K・R・U・SはそれぞれS=石英, C=長石, K=角閃石, R=小石, U=雲母を指す。  
※表中の径については, 完形でないものは, 復元径である。

採掘 番号	遺物 番号	層	器種	部位	胎土	色		器面調整		焼成	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考
						外	内	外	内					
4	4	Ⅲb	甕	完形	S・C・K	7.5YR6/4にぶい橙	10YR7/3にぶい黄橙	ハケメ	ハケメ	良	20	8.4	21.8	
4	5	Ⅲb	甕	完形	S・C・K	7.5YR6/4にぶい橙	10YR7/4にぶい黄橙	ハケメ		良	21.6	8.5	20	
4	6	Ⅲb	甕	完形	S・C・K	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR8/3淡黄橙	ハケメ	ハケメ	良	23	9.3	20.6	
6	7	Ⅲb	甕	胴~脚台	S・C・K	10YR6/6明黄橙	10YR6/5明黄橙	ハケメ	ハケメ	良		9.5		
6	8	Ⅲb	甕	完形	S・C・K	7.5YR7/3にぶい橙	7.5YR5/6橙	ハケメ・ナデ・指押さえ	ハケメ・ナデ・指押さえ	良	29	9.5	36.6	刻目突帯(縦線付)
6	9	Ⅲb	甕	口~胴部	S・C・K	10YR7/2にぶい黄橙	2.5YR7/5黄	ハケメ	ハケメ	良	30.8			刻目突帯
6	10	Ⅲb	甕	口~胴部	S・C・K	7.5YR3/4にぶい橙	10YR6/6明黄橙	ハケメ	ハケメ・ナデ	良	27			刻目突帯
6	11	Ⅲb	甕	口~脚台	S・C・K	10YR4/3にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	ハケメ		良				刻目突帯
6	12	Ⅲb	甕	完形	S・C・K	10YR4/6橙	10YR5/6黄橙	ハケメ	ハケメ	良	18.2	7.9	18.7	刻目突帯
6	13	Ⅲb	甕	完形	S・C・K	7.5YR5/4にぶい橙	10YR7/3にぶい黄橙	ハケメ	ハケメ	良	16.8	7.2	17.5	刻目突帯
6	14	Ⅲb	甕	完形	S・C・K	10YR6/3にぶい黄橙	10YR6/8にぶい黄橙	ハケメ・ナデ	ハケメ	良	12.8	6.2	13.8	刻目突帯
6	15	Ⅲb	甕	完形	S・C・K	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	ハケメ	ハケメ	良	24	10.8	35.1	断面三角形突帯
6	16	Ⅲb	甕	口~底部	S・C・K	10YR4/3にぶい黄橙	10YR5/3にぶい黄橙	ハケメ・ナデ	ハケメ	良	18.2			断面三角形突帯
7	17	Ⅲb	甕	完形	S・C・K	10YR6/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	ハケメ	ハケメ	良	27.2	9.9	38.1	断面三角形突帯
7	18	Ⅲb	甕	口~胴部	S・C・K	7.5YR3/3暗橙	7.5YR6/3にぶい橙	ハケメ	ハケメ	良	34.6			断面三角形突帯
6	19	Ⅲb	甕	完形	S・C・K	10YR7/4にぶい黄橙	10YR5/6黄橙	ハケメ・ナデ	ハケメ	良	19	8.3	22.9	断面三角形突帯
6	20	Ⅲb	甕	完形	S・C・K	7.5YR6/6橙	7.5YR6/4にぶい橙	ハケメ・ナデ・指押さえ	ハケメ・指押さえ	良	25.4	9.6	35.5	刻目突帯
7	21	Ⅲb	甕	口~胴部	S・C・K	10YR3/1黒橙	10YR5/4にぶい黄橙	ハケメ	ハケメ	良	29.4			刻目突帯
7	22	Ⅲb	甕	完形	S・C・K	5YR6/4にぶい橙	10YR6/8明黄橙	ハケメ	ハケメ	良	19.4	10.2	25	刻目突帯
6	23	Ⅲb	甕	完形	S・C・K	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	ハケメ・指押さえ	ハケメ	良	10.4	7.4	13.8	刻目突帯
6	24	Ⅲb	甕	完形	S・C・K	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	ハケメ・指押さえ	ハケメ・指押さえ	良	28	11.1	35.7	断面三角形突帯
6	25	Ⅲb	甕	口~底部	S・C・K	7.5YR6/3にぶい橙	5YR7/3明黄橙	ハケメ・ミガキ	ハケメ・指押さえ	良	31.8			断面三角形突帯
6	26	Ⅲb	甕	完形	S・C・K	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	ハケメ・ナデ	ハケメ	良	31.2	10.5	28.5	刻目突帯
6	27	Ⅲb	甕	口~底部	S・C・K	10YR6/3にぶい黄橙	10YR6/8にぶい黄橙	ハケメ	ハケメ・指押さえ	良	29			刻目突帯
6	28	Ⅲb	甕	口~胴部	S・C・K	10YR5/3にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	ハケメ	ハケメ	良	28.7			刻目突帯
6	29	Ⅲb	甕	胴~脚台	S・C・K	10YR7/2にぶい黄橙	10YR6/2反黄橙	ハケメ・指押さえ	ハケメ・ナデ・指押さえ	良		8.6		
6	30	Ⅲb	甕	胴~脚台	S・C・K	10YR3/2灰白	7.5YR7/4にぶい橙	ハケメ・指押さえ	ハケメ	良		10.8		
6	31	Ⅲb	甕	胴~脚台	S・C・K	7.5YR3/2黒橙	7.5YR5/6明黄	ハケメ・ナデ	ハケメ・指押さえ	良		10.2		
6	32	Ⅲb	甕	胴~脚台	S・C・K	10YR7/3にぶい黄橙	10YR6/3にぶい黄橙	ハケメ・指押さえ	ハケメ・ナデ	良		6.8		
6	33	Ⅲb	甕	胴~脚台	S・C・K	5YR7/2明黄橙	5YR7/4にぶい橙	指押さえ	指押さえ	良		9		
6	34	Ⅲb	甕	胴~脚台	S・C・K	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	ハケメ・指押さえ	ナデ	良		9		
6	35	Ⅲb	甕	胴~脚台	S・C・K	10YR6/1褐灰	10YR7/3にぶい黄橙	ハケメ	ハケメ・指押さえ	良		10.2		
6	36	Ⅲb	甕	胴~脚台	S・C・K	2.5YR5/4にぶい赤橙	7.5YR7/4にぶい橙	ハケメ		良		11		
6	37	Ⅲb	甕	胴~脚台	S・C・K	10YR6/4にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	ハケメ	ハケメ	良		8.5		
6	38	Ⅲb	甕	底~脚台	S・C・K	10YR6/2灰白	10YR8/2灰白	ハケメ・指押さえ	ハケメ・ナデ	良		10.2		
6	39	Ⅲb	甕	底~脚台	S・C・K	10YR7/1灰白	10YR7/1灰白	ハケメ	ハケメ	良		10		
6	40	Ⅲb	甕	底~脚台	S・C・K	7.5YR3/4淡黄橙	7.5YR8/4淡黄橙	ハケメ	ハケメ	良		9.9		
6	41	Ⅲb	甕	底~脚台	S・C・K	10YR8/3淡黄橙	10YR7/2にぶい黄橙	ハケメ	ナデ	良		11		
6	42	Ⅲb	甕	底~脚台	S・C・K	7.5YR6/6橙	7.5YR4/4橙	ハケメ・指押さえ	ハケメ・指押さえ	良		10.4		
6	43	Ⅲb	甕	底~脚台	S・C・K	10YR5/2反黄橙	7.5YR5/4にぶい橙	ハケメ	ハケメ	良		9.8		
6	44	Ⅲb	甕	底~脚台	S・C・K	10YR6/3にぶい黄橙	7.5YR6/6橙	ハケメ	ハケメ・指押さえ	良		8		
6	45	Ⅲb	甕	底~脚台	S・C・K	5YR6/6橙	10YR7/2にぶい黄橙	ハケメ	ハケメ・ナデ	良		9		
6	46	Ⅲb	甕	底~脚台	S・C・U	7.5YR7/3にぶい黄橙	7.5YR7/3にぶい黄橙	ハケメ・ナデ	ナデ	良		7.8		
6	47	Ⅲb	甕	底~脚台	S・C・K	10YR6/4にぶい黄橙	10YR5/6黄橙	ハケメ		良		11.6		
6	48	Ⅲb	甕	脚台	S・K	7.5YR6/3にぶい黄橙	7.5YR5/3にぶい黄橙	ハケメ・ナデ	ハケメ	良		15.6		
6	49	Ⅲb	甕	口~胴部	S・C・K	10YR3/1黒橙	10YR6/4にぶい黄橙	ハケメ・ミガキ	ハケメ	良	14.4			刻目突帯(縦線付)
6	50	Ⅲb	甕	口~胴部	S・C・K	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	ハケメ・指押さえ	ハケメ・ナデ・指押さえ	良	15			刻目突帯
6	51	Ⅲb	甕	完形	S・C・K	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	ハケメ	ハケメ・ナデ	良	8	2.4	12.05	刻目突帯
6	52	Ⅲb	甕	胴~底部	S・K	7.5YR5/6明黄橙	7.5YR5/6明黄橙	ナデ	ナデ	良		1.4		突帯
6	53	Ⅲb	甕	胴~底部	S・C・K	10YR6/1褐灰	10YR6/2反黄橙	ハケメ	ハケメ	良		4.2		刻目突帯
6	54	Ⅲb	甕	完形	S・K	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/6明黄橙	ミガキ	ハケメ・ナデ	良	10	1	19.7	刻目突帯
6	55	Ⅲb	甕	完形	S・C・K	7.5YR2/1黒	10YR5/4にぶい黄橙	ハケメ		良	8.4	1.8	14.4	刻目突帯
6	56	Ⅲb	甕	完形	S・C・K	7.5YR7/4にぶい黄橙	7.5YR7/4にぶい黄橙	ハケメ		良	4.6	2.2	9.3	刻目突帯
6	57	Ⅲb	甕	胴~底部	S・K	7.5YR7/3にぶい黄橙	7.5YR7/3にぶい黄橙	ハケメ	ナデ	良		3		刻目突帯
6	58	Ⅲb	甕	胴~底部	S・C・K	7.5YR6/4にぶい黄橙	7.5YR6/4にぶい黄橙	ハケメ	ハケメ・指押さえ	良		6.4		刻目突帯
6	59	Ⅲb	甕	完形	S・C・K	7.5YR6/4にぶい黄橙	7.5YR6/4にぶい黄橙	ハケメ	ハケメ	良	9.4	2.1	19.7	突帯
6	60	Ⅲb	甕	完形	S・K	2.5YR5/4にぶい赤橙	2.5YR5/4にぶい赤橙	ハケメ	ハケメ	良	6.9	2.6	11.4	断面三角形突帯
6	61	Ⅲb	甕	胴~底部	S・C・K	7.5YR5/6明黄橙	7.5YR5/6明黄橙	ハケメ	ナデ	良		2.5		
6	62	Ⅲb	甕	完形	S・C・K	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	ハケメ	ハケメ	良	8.1	3.5	18.2	
6	63	Ⅲb	甕	完形	S・K	7.5YR7/3にぶい黄橙	7.5YR8/4淡黄橙	ハケメ	ナデ	良	9	1.9	17	
6	64	Ⅲb	甕	胴~底部	S・K	2.5YR7/2反黄	2.5YR7/2反黄	ハケメ		良				
6	65	Ⅲb	甕	完形	S・C・K	2.5YR7/2反黄	2.5YR7/2反黄	ハケメ	指押さえ	良	16.4	2.6	15.8	



第5表 西ノ原遺跡包含層出土遺物観察表(3)

※胎土のS・C・K・R・U・SはそれぞれS=石英, C=長石, K=角閃石, R=小石, U=炭粉を指す。  
※表中の括弧については、完形でないものは、復元種である。

採掘 番号	遺物 番号	器種	部位	胎土	色		器面		口径 (cm)	口径 (cm)	器高 (cm)	備考		
					外	内	外	内						
12	66	皿b	蓋	完形	K	7.5YR7/3にぶい粉	7.5YR7/2明褐色	ハケメ	ハケメ・指おさえ	良	8.6	4.2	13	
12	67	皿b	蓋	完形	S・C	7.5YR7/3にぶい粉	7.5YR8/3淡黄褐色	ハケメ	ハケメ	良	6.4	2.8	10.3	
13	68	皿b	蓋	完形	S・C・K・U	5YR6/3にぶい粉	5YR7/4にぶい粉	ハケメ		良	9.8	7.3	19.7	埋頭蓋
13	69	皿b	蓋	完形	K	7.5YR7/3にぶい粉	7.5YR7/1明褐色	ハケメ	ハケメ	良	7	2.2	12.5	埋頭蓋
13	70	皿b	蓋	底部	S・K	7.5YR7/4にぶい粉	7.5YR7/3にぶい粉	ハケメ	ハケメ	良		5		
13	71	皿b	高杯	完形	K	7.5YR6/6橙	7.5YR6/4にぶい粉	ミガキ	ミガキ	良	22	14.2	17.9	
13	72	皿b	高杯	胴部・底部	S・C・K	5YR4/6赤褐色	5YR5/4にぶい赤褐色	ミガキ	ミガキ・ハケメ	良		12		片蓋
13	73	皿b	高杯	胴部	K	5YR6/4にぶい粉	5YR7/4にぶい粉	ミガキ	ミガキ	良	15.4			
13	74	皿b	高杯	完形	S・C・K	10YR5/4にぶい黄褐色	10YR7/4にぶい黄褐色	ミガキ	ミガキ	良	18	9.8	13.3	
13	75	皿b	高杯	胴部	S・C・K	5YR4/6赤褐色	5YR5/6明赤褐色	ミガキ	ハケメ	良	19.4			片蓋
13	76	皿b	高杯	胴部	S・C	7.5YR7/4にぶい粉	7.5YR6/3にぶい粉	ハケメ・ナデ	ハケメ	良	17.4			
13	77	皿b	高杯	胴部	C・K	7.5YR7/3にぶい粉	7.5YR7/2明褐色	ミガキ	ハケメ・ナデ	良		15.8		
13	78	皿b	鉢	完形	S・C・K	7.5YR7/4にぶい粉	7.5YR8/4淡黄褐色	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	良	19.8	8.4	18	
13	79	皿b	鉢	完形	S・C・K	7.5YR8/1灰白	5YR6/3にぶい粉	ハケメ	ハケメ	良	13.6	7.5	7.6	
14	80	皿b	鉢	完形	C・K	10YR5/4にぶい黄褐色	7.5YR6/6橙	ハケメ	ハケメ	良	20.6	9.4	15.2	
14	81	皿b	鉢	完形	S・C・K	5YR6/6橙	5YR6/6橙	ハケメ・指おさえ	ハケメ	良	20.5	9.6	15.3	
14	82	皿b	鉢	完形	S・C・U	7.5YR7/1明褐色	7.5YR7/2明褐色	ハケメ・ナデ・指押さえ	ハケメ・ナデ・指押さえ	良	20.9	6.6	14.1	
14	83	皿b	鉢	完形	S・C・K	7.5YR5/4にぶい粉	7.5YR6/4にぶい粉	ハケメ・ナデ・指おさえ	ハケメ	良	15	7.4	15.9	
14	84	皿b	鉢	完形	S・C・K	10YR8/2灰白	10YR8/2灰白	ハケメ	ハケメ・指押さえ	良	21.4	5.6	14	
14	85	皿b	鉢	完形	S・C	7.5YR5/8明褐色	7.5YR6/8明褐色	ナデ	ハケメ	良	14.6	5.8	16	
14	86	皿b	鉢	完形	S・K	10YR7/4にぶい黄褐色	10YR6/3にぶい黄褐色	ハケメ・ナデ	ハケメ	良	12		8	
14	87	皿b	鉢	完形	S・C・K	2.5YR4/6赤褐色	5YR6/6橙	ミガキ	ミガキ・ハケメ	良	11.2		7.5	
14	88	皿b	鉢	完形	S・C・K	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	ハケメ	ハケメ	良	23.6		17.3	
14	89	皿b	鉢	完形	S・C・K	7.5YR5/6明褐色	7.5YR6/4にぶい粉	ハケメ	ナデ	良	17	6.4	8.5	
14	90	皿b	鉢	底部	C・K	10YR6/2灰黄褐色	10YR6/4にぶい黄褐色	ハケメ	ハケメ	良		6.7		
14	91	皿b	鉢	底部	S・C・K	10YR7/2にぶい黄褐色	7.5YR7/4にぶい粉	ハケメ	ハケメ	良		6.8		
14	92	皿b	罎	完形	S・C	7.5YR2/3極暗褐色	7.5YR5/4にぶい粉	ミガキ		良	6.8	3.4	11.7	黒色
14	93	皿b	罎	完形	S・C・K	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	ハケメ・ミガキ	ハケメ	良	6.2	3.2	8.9	
15	94	皿b	罎	完形	S・C・K	7.5YR7/6橙	7.5YR6/6橙	ミガキ	ハケメ	良	7.8		8.9	
15	95	皿b	罎	完形	S・C	7.5YR8/2灰白	7.5YR8/2灰白	ミガキ		良	7.6	3.4	10.5	
15	96	皿b	罎	完形	S・C	2.5YR6/4にぶい粉	5YR7/4にぶい粉	ミガキ・ハケメ	ハケメ	良	8.6	4.7	10.1	
15	97	皿b	罎	完形	K	5YR5/8明赤褐色	5YR5/8明赤褐色	ミガキ・ハケメ	ハケメ	良	6.4	2.4	7.7	
15	98	皿b	罎	胴・底部	S・K	5YR7/1明褐色	5YR7/2明褐色	ミガキ		良		2	6.6	
15	99	皿b	罎	完形	S・C・R・U	7.5YR6/3にぶい粉	7.5YR7/3にぶい粉	ハケメ・指おさえ	指おさえ	良	6.9	5.4	7	
15	100	皿b	罎	胴・底部	S・K	5YR6/3にぶい粉	2.5YR6/8赤褐色	ミガキ	ナデ	良	6.1	13.7	丹塗	
15	101	皿b	罎	胴部・底部	S・C・K	10YR5/4にぶい黄褐色	2.5YR7/1灰白	ミガキ	ハケメ	良	8.6			洗滌, 有孔
15	102	皿b	罎	完形	S・C・K	10YR4/6赤	10YR4/6赤	ミガキ	ミガキ	良	8.6	3.9	9.4	有孔, 丹塗
15	103	皿b	罎	胴・底部	C・K	7.5YR4/6赤	7.5YR7/6橙	ミガキ	ミガキ	良		5.4		有孔
15	104	皿b	罎	胴・底部	S・C・K	10YR6/4にぶい黄褐色	10YR5/1福灰	ハケメ・指おさえ	ハケメ・指押さえ	良				
15	105	皿b	ミニチュア	完形	S・C・K	7.5YR7/4にぶい粉	10YR7/3にぶい黄褐色	ハケメ・指おさえ	ハケメ・指おさえ	良	7.2	4	7.35	
15	106	皿b	ミニチュア	完形	S・C・K	5YR7/2明褐色	5YR8/2灰白	ハケメ・指おさえ	ナデ	良	8.4	5.1	7.7	
15	107	皿b	ミニチュア	完形	S・C・K	10YR8/4淡黄褐色	10YR7/3にぶい黄褐色	指おさえ	指おさえ	良	8	4.4	6.3	
15	108	皿b	ミニチュア	完形	S・C・K	10YR7/4にぶい黄褐色	10YR7/4にぶい黄褐色	ナデ・指おさえ		良	8.85		7.35	
15	109	皿b	ミニチュア	胴・底部	S・K	7.5YR6/8橙	7.5YR5/4にぶい粉	ハケメ・指おさえ	指押さえ	良		4	6	
15	110	皿b	ミニチュア	完形	S・C・K	10YR5/4にぶい黄褐色	2.5YR8/2灰白	ハケメ	ハケメ	良	7.3	2.8	5	
15	111	皿b	ミニチュア	完形	S・C・K	10YR6/3にぶい黄褐色	10YR6/3にぶい黄褐色	指おさえ		良	7.1		5.05	
15	112	皿b	ミニチュア	完形	S・K	10YR7/4にぶい黄褐色	10YR7/4にぶい黄褐色			良	7.8	3.9	6.5	
15	113	皿b	ミニチュア	完形	S・C・K	7.5YR5/4にぶい粉	7.5YR5/4にぶい粉	ハケメ・指おさえ	ハケメ	良	8.4	4.2	5.6	
15	114	皿b	ミニチュア	完形	K	10YR6/6明褐色	10YR7/8黄褐色	ハケメ・ミガキ	ハケメ・指おさえ	良	7.4	2.7	6.5	
15	115	皿b	ミニチュア	完形	S・K	7.5YR6/4にぶい粉	7.5YR7/4にぶい粉	指おさえ	ハケメ・指おさえ	良	10	5	8	
15	116	皿b	ミニチュア	完形	S・C・K	10YR7/4にぶい黄褐色	10YR7/4にぶい黄褐色	ハケメ・指おさえ	ハケメ	良	9.8	3.8	5.8	
15	117	皿b	ミニチュア	完形	S・C・K	5YR3/1オリーブ黒	2.5YR6/2灰黄褐色	ハケメ・指おさえ	ハケメ・指おさえ	良	9.8	3.0	7	
15	118	皿b	ミニチュア	完形	S・C・K	10YR8/1灰白	10YR8/1灰白	指おさえ	指おさえ	良	8.2	4.4	6.9	
15	119	皿b	ミニチュア	完形	S・C・R・U	10YR5/8黄褐色	7.5YR7/4にぶい粉		ハケメ・指おさえ	良	8	3.0	5.8	
15	120	皿b	ミニチュア	完形	S・C・K	7.5YR5/4にぶい粉	7.5YR6/6橙	ハケメ・指おさえ		良	7.8	3.4	6.1	
15	121	皿b	ミニチュア	完形	S・C・K	2.5YR6/2灰黄褐色	2.5YR6/3にぶい粉	指おさえ	ハケメ	良	5	3.2	5	
15	122	皿b	ミニチュア	完形	S・C・K	2.5YR8/3にぶい黄褐色	10YR7/4にぶい黄褐色	指おさえ	指おさえ	良	8.05	4.8	6.1	
15	123	皿b	ミニチュア	完形	S・C・K	10YR7/3にぶい黄褐色	2.5YR7/1灰白	指おさえ	指おさえ	良	7.9	3.4	6.8	
15	124	皿b	ミニチュア	完形	S・C・K	7.5YR5/6明褐色	7.5YR4/6赤	指おさえ	指おさえ	良	5.7	3.1	5	
15	125	皿b	ミニチュア	完形	S・C・K	10YR4/6赤	7.5YR5/4にぶい粉	指おさえ	指おさえ	良	6.2	2	4	
15	126	皿b	ミニチュア	完形	S・C・K	10YR6/3にぶい黄褐色	10YR7/3にぶい黄褐色	指おさえ	指おさえ	良	5.1	1.9	4	
15	127	皿b	ミニチュア	完形	S・C・K	10YR7/4にぶい黄褐色	10YR7/2にぶい黄褐色	指おさえ	指おさえ	良	6		5	

## 第IV章 まとめ

西ノ原遺跡の発掘調査は、平成17年9月に垂水市を通過した台風14号による災害復旧工事(砂防激甚災害対策特別緊急工事)であるため、最低限必要な範囲・期間・方法で実施した。具体的には、土器溜りの調査にのみ限られる。よって、本章の記述も、この土器溜りに限られることとなり、その点をご了承いただきたい。

### 第1節 遺構

前述したように、今回の発掘調査は、土器溜りにのみ限られる。

この土器溜りは、面積約50㎡で、特に掘り込み等は確認されなかった。また、遺物包含層も、埋蔵されていた土器の器高分、つまり約10~30cm程度であったことから、この土器溜りは、自然地形上にそのまま大量の土器を安置して形成されたと考えられる。

土器溜りを形成する遺物は、いわゆる成川式に限られるため、土器溜りの形成時期も、成川式に伴う時期と考えられる。土器の出土状況は、限られた範囲から密集して出土しており、まさに足の踏み場も無いほどであった。完形もしくはそれに近いものも多数ふくまれており、中には2~3個の土器が入れ子状になったものもあった。

土器溜りが河川に隣接して形成されていること、土器溜りを形成する土器に完形のものが多いこと、入れ子状の土器の出土などから、この土器溜りが単に土器廃棄の結果として形成されたものではなく、何らかの祭祀に関連して形成されたものと考えられる。

### 第2節 遺物

本遺跡から出土した遺物は、土器溜り状に出土した、弥生時代後半から古墳時代にかけて使用されたと考えられているいわゆる成川式に限られる。

成川式土器は、「古墳時代にいたっても弥生式土器の伝統を色濃く残し、土師器への転換を拒み続けた排他的な土器様式」として知られている土器である。一方、成川式土器の時間的様式界の問題や、各研究者による編年観や分類の仕方等に様々な問題があるのも事実である。このように諸問題を含んだ成川式土器の研究について、画期的なものとして認識されているのが、各器種の形式分類から6つの分類に様式設定した(中村, 1987)中村直子の研究であろう。中村はその後も成川式土器に関する研究・発表を続けており、今回報告書を作成するに際しても参考とするところが大きかったのだが、今回はその中でも2002年に中村が発表した研究を特に参考とした。以下、成川式土器の形式分類に関する用語等は、中村の研究・用語を参考・引用した。

中村は、成川式土器について、4つの時期を設定し、器種ごとに編年を試みている(中村, 2002)。器種については、甕を6系統24種類に、壺を6系統21種類に、高杯を8系統16種類に、鉢を9系統26種類に、罎を9系統16種類に細別している。また、成川式土器の分布域に着目し、A. 北薩地域、B. 肝属平野、C. 薩摩半島・鹿児島湾岸の3地域を設定し、各地域ごとに土器の器形や器種組成において特徴が見られることも指摘している。紙面の都合上それぞれについての説明は割愛するが、この編年を活用して迫田遺跡出土の成川式土器について分類を試みる。

迫田遺跡出土の成川式土器を、中村の編年に対応させると、第6表のようになる。この表を時期別に整理しなおすと、第7表のようになる。以下、この2表より導き出せることを述べる。

まず、器種ごとの特徴を述べる。甕については、①丸底甕の出土が殆ど見られない②脚台の形状は、底に向かい直線的に下りるものが多く（端部で外反するものもある）、内部の形状は、平坦気味であるものの、中央部が若干盛り上がる器形のものが多い③時期的には1期～3期のものが多く、1期のものは殆ど出土していないといったことがあげられる。①については、薩摩半島・鹿児島湾岸地域の甕に見られる特徴である。②について補足すると、本稿では、甕の脚台については、本田道輝の研究（本田、1997）を参考とした。紙面の都合上詳細は割愛するが、本田によると、南部九州の脚台付甕の打ち、中空脚台は3類に分類できる。西ノ原遺跡出土のものは、このうちⅡ類の特徴をもつものが多い。もっとも、ものによっては、内面天井部の調整がやや粗雑で、突起状に盛り上がっているものあり、それらのものは、Ⅲ期に近い時期またはⅡ類からⅢ期への移行期間に製作された可能性もある。壺についても、1期～4期のものが見られるが、1期～3期のものが多いという点が上げられる。あまり多くはないが、未実測分中いわゆる幅広突帯を有するものがあることも報告しておく。高杯・鉢・埴について、点数が少なく判然としないが、高杯については、甕・壺とは対照的に、4期のものが多いという点があげられる。埴については、特徴的なもの(92)の出土があげられる。92は黒色で突帯を有する埴で、やはり古墳時代の遺跡である垂水市後ヶ迫A遺跡から類似のもの(211)が出土している。

次に、西ノ原遺跡出土の成川式土器全体を通じて言える特徴について述べる。まず、1期から4期までのものが認められることがあげられる。中村は成川式土器の編年に際して4つの時期を設定していることは前述したとおりである。その時期に関して、上限については「弥生時代終末期」とし、下限については「7世紀末」としている。つまり、迫田遺跡出土の成川式土器は、弥生時代終末期から7世紀にかけての長い時間に渡るものが出土しているということである。

次に、点数に注目すると、1～3期と分類したものが多く、4期のものは少ない（もっとも、これはあくまである程度復元が可能であった図化したもの（第3章第4節で取り上げたもの）についての結果であり、土器片については未検討である）。また、脚台付甕の脚台の形状に注目すると、本田がⅡ類としたものが多い。つまり、西ノ原遺跡の成川式は、新しい時期のものが少なく、それ以前の時期のものが多いと言える。

これらのことから、西ノ原遺跡の形成時期について、①成川式のすべての時期を通じて遺跡が継続的或いは断続的に形成されたまたは②成川式の最も新しい時期に、突発的に遺跡が形成されたという2つの想定が導き出せる。残念なことに、西ノ原遺跡からは遺跡の下限を決定するのに重要な要素と成る須恵器の出土が無く、明確な時期決定はできないが、土器溜という出土状況、また掘り込み等が見られないという出土状況や、河川の隣接地という立地などの要素から考えると、現段階では、②の成川式のもっとも新しい時期に遺跡が突発的に形成されたという想定の方が有力視できると考えられる。

次に、入れ子状の出土状態について考察する。第3章第4節で、西ノ原遺跡出土の甕・壺を、サイズの3段階に分類した。3段階という分け方は筆者の見解でしか無いものの、西ノ原遺跡出土の甕・壺は、明らかに幾つかのサイズのグルーピングが可能である。又、高杯・鉢においても、

第6表 西ノ原遺跡出土の成川式土器と、中村の提示する成川式土器分類との対応表（器種別）

中村の分類	西ノ原		中村の分類	西ノ原		中村の分類	西ノ原		中村の分類	西ノ原	
	点数	%		点数	%		点数	%		点数	%
甕A1		0.0	甕Aa1		0.0	高杯A		0	鉢Aa1		0
甕A2	Aa	3 6.3	甕Aa2		0.0	高杯Ba1		0	鉢Aa2		0
甕A3	Ab	3 6.3	甕Aa3		0.0	高杯Ba2		0	鉢Aa3	A1A2	2 14.3
甕Ba1	Ba,Bc,Bd	5 10.4	甕Aa4		0.0	高杯Ba3		0	鉢Ba	B1,B2	4 28.6
甕Ba2	Bb	5 10.4	甕Ab		0.0	高杯Bb1		0	鉢Bb		0
甕Ba3	C	3 6.3	甕Ba1	Aa,Ab,Ba,Bb	5 22.7	高杯Bb2		0	鉢Bc		0
甕Ba4		0.0	甕Ba2	Ba,Bc	3 13.6	高杯Bc		0	鉢Bc		0
甕Bb1	Da,Db	6 12.5	甕Ba3		0.0	高杯Ca1		0	鉢Bc		0
甕Bb2		0.0	甕Bb1		0.0	高杯Ca2		0	鉢Bc		0
甕Bc		0.0	甕Bb2		0.0	高杯Ca3	A1A2B	4 57	鉢C1		0
甕Bd		0.0	甕Ca		0.0	高杯Cb		0	鉢C2		0
甕Ca	E	3 6.3	甕Cb		0.0	高杯D1		0	鉢D		0
甕Cb		0.0	甕Cc1		0.0	高杯D2		0	鉢Ea	C1	1 7.14
甕D1		0.0	甕Cc2		0.0	高杯E		0	鉢Eb		0
甕D2		0.0	甕Da1		0.0	高杯F		0	鉢Ec	C2	3 21.4
甕D3		0.0	甕Da2		0.0	高杯G		0	鉢Ed		0
甕Ea1		0.0	甕Db1	C	4 18.2	高杯H	C	2 29	鉢Ee	D	1 7.14
甕Ea2		0.0	甕Db2	C	1 4.5	不明品		1 14	鉢F		0
甕Eb1		0.0	甕Ea		0.0	計		7 100	鉢Ga		0
甕Eb2		0.0	甕Eb		0.0				鉢Gb		0
甕Ec		0.0	甕F		2 9.1				鉢Gc	E	1 7.14
甕Ed		0.0	不明品		7 31.8				鉢Gd		0
不明品	20	41.7	計		22 100				鉢Ge		0
計	48	100							鉢Gf		0
									鉢Gg		0
									不明品		2 14.3
									計		14 100

第7表 西ノ原遺跡出土の成川式土器と、中村の提示する成川式土器分類との対応表（時期別）

期	中村		西ノ原		期	中村		西ノ原		期	中村		西ノ原		期	中村		西ノ原	
	西ノ原	点数	%	西ノ原		点数	%	西ノ原	点数		%	西ノ原	点数	%		西ノ原	点数	%	
1	A1	0	0.0	Aa1	0	0.0	2	A	0	0.0	1	Aa1	0	0.0	1	A	0	0.0	
	Ba1	Ba,Bc,Bd	5 10.4	Ba1	Aa,Ab,Ba,Bb	5 22.7		Ca1	0	0.0		Ba	B1,B2	4 28.6		B1	0	0.0	
2	A2	Aa	3 6.3	Aa2	0	0.0	3	Ba1	0	0.0	2	Ba	C1	1 7.14	3	C1	Ba	1 7.7	
	Ba2	Bb	5 10.4	Ba2	Ba,Bc	3 13.6		Ba2	0	0.0		F	0	0.0		E1	0	0.0	
3	A3	Ab	3 6.3	Bb1	0	0.0	4	Ba3	0	0.0	3	Ba3	0	0.0	4	B2	A	1 7.7	
	Ba3	C	3 6.3	Aa3	0	0.0		Ca2	0	0.0		Aa2	0	0.0		D1	0	0.0	
4	Bb1	Da,Db	6 12.5	Ba3	0	0.0	不明品	D2	0	0.0	不明品	Bb	0	0.0	不明品	C2	Bb	1 7.7	
	Bb2	0	0.0	Bb2	0	0.0		Ba4	0	0.0		D	0	0.0		E2	0	0.0	
不明品	Ca	E	3 6.3	Aa4	0	0.0	不明品	Ba4	0	0.0	不明品	Ba4	0	0.0	不明品	F	0	0.0	
	Bd1	0	0.0	Ab	0	0.0		Bc	0	0.0		Bb	0	0.0		G	0	0.0	
不明品	Ba4	0	0.0	不明品			不明品	Bb2	0	0.0	不明品	Bc	0	0.0	不明品	G	0	0.0	
	Bc	0	0.0	不明品				Ca3	A1A2B	4 57		Aa3	A1A2	2 14.3		B8	0	0.0	
不明品	Cb	0	0.0	不明品			不明品	Ca3	0	0.0	不明品	Dc	0	0.0	不明品	D2	C	1 7.7	
	不明品			不明品				Cb	0	0.0		Bd	0	0.0		k	En	1 7.7	
不明品	D1	0	0.0	不明品			不明品	E	0	0.0	不明品	Cb	0	0.0	不明品	C3	Bc	3 23	
	D2	0	0.0	不明品				F	0	0.0		Bc	0	0.0		H	0	0.0	
不明品	D3	0	0.0	不明品			不明品	G	0	0.0	不明品	Cc1	0	0.0	不明品	H	0	0.0	
	Ea1	0	0.0	不明品				不明品	1	14		Cc2	0	0.0		Ib	Eb	1 7.7	
不明品	Eb1	0	0.0	不明品			不明品	不明品			不明品	Cc2	3	21.4	不明品	不明品	3	23	
	Fa	0	0.0	不明品				不明品				不明品	0	0.0		不明品			
不明品	Fc	0	0.0	不明品			不明品	不明品			不明品	不明品	0	0.0	不明品	不明品	0	0.0	
	Ea2	0	0.0	不明品				不明品	不明品				不明品	不明品		0	0.0	不明品	不明品
不明品	Eb2	0	0.0	不明品			不明品		不明品			不明品		不明品	0	0.0	不明品		不明品
	Fb	0	0.0	不明品				不明品	不明品				不明品	不明品	0	0.0		不明品	不明品
不明品	Fd	0	0.0	不明品			不明品		不明品			不明品		不明品	0	0.0	不明品		不明品
	不明品	20	41.7	不明品				不明品	不明品				不明品	不明品	0	0.0		不明品	不明品
不明品	20	41.7	不明品			不明品				不明品				不明品			不明品		

甕・壺ほど顕著ではないものの、サイズのなグループリングが見られる。現段階ではデータが少なく、想像の域を脱しないが、入れ子状の出土と考え合わせると、入れ子を意識した上での土器製作が行われた可能性も想定される。この想定を推し進めると、土器溜りについても、土器廃棄の結果形成されたのでは無く、土器溜りを形成するのが目的であったという想定も導き出せるのではないだろうか。西ノ原遺跡の土器溜りの意義について、今後の更なる検討が必要であろう。

### 第3節 小結

垂水市においては、このように成川式が土器溜り状に検出される例が多い。垂水市柘原地区の後ヶ迫 A 遺跡（平成 8 年度発掘）、中俣地区の迫田遺跡（平成 11 年度発掘調査）、同じく中俣地区の森田遺跡（平成 14 年度発掘調査）の 3 遺跡において、いずれも成川式の土器溜りが検出している（このうち、後ヶ迫 A 遺跡からは 4 基の土器溜りが検出している）。

これらの土器溜りに共通する要素として、①構成する土器が成川式に限られる（最も土器型式は様々なものがあり、時間的には限定されるものではなく、若干の時期差は存在する）②出土した土器の中には、完形品が多く含まれ、中には特徴的なもの（形、丹塗りのもの、入れ子状のものなど）が存在する③いずれの土器溜りも、掘り込み等は確認できず、自然地形にそのまま土器を安置したように形成される④いずれの遺跡も河川の近くに立地する、といった要素があげられる。これらの要素から、いずれの土器溜りも、単に土器廃棄の結果形成されたものではなく、何らかの祭祀と関連するものと考えられる。また、いずれの土器溜りも河川の近くから出土していることから、祭祀が水と関連するものであったことも考えられる。

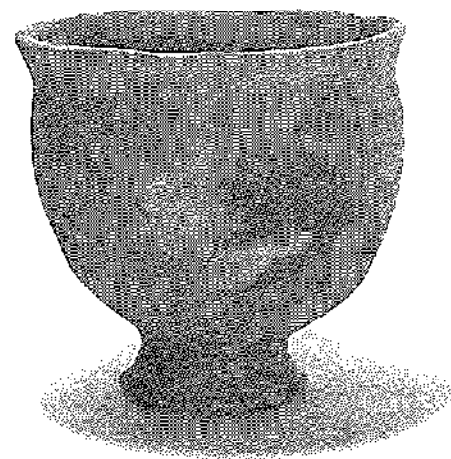
このことから、成川期の垂水市には、祭祀と関連する土器溜りを形成する文化があったと考えられるのではないだろうか。もっとも、今の段階では明確に断言できるものではなく、今後の研究が待たれるところである。

西ノ原遺跡の発掘調査は、起因事業を鑑み最低限の調査が行われたのみである。今回の調査で、今まで殆ど発掘調査が実施されていなかった牛根地域の古代の様相について、その一角が明らかになった。しかしながら、牛根地区の太古の様相については、以前として謎に包まれた部分が多い。今後の発掘調査が期待される。

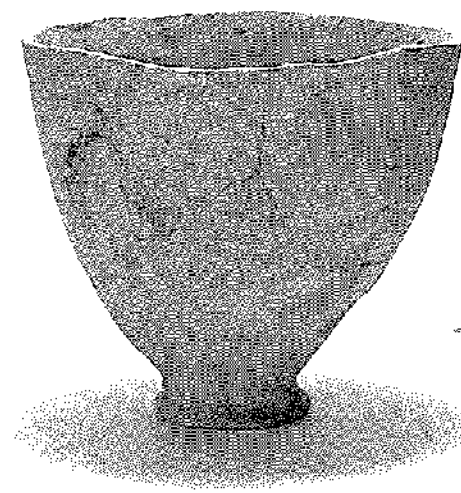
#### 【参考・引用文献】

- 中村直子 1987 「成川式土器再考」『鹿大考古』6：57－56
- 中村直子 1999 「古墳地帯と古墳地帯のコミュニケーション  
—南九州の土器をメディアとして—」鹿児島大学教育研究学内特別経費  
全学プロジェクト『新しい関係をもとめて—コミュニケーションの諸相—』
- 中村直子 2002 「薩摩・大隅」『古墳時代中・後期の土師器—その編年と地域性—』  
第5回九州前方後円墳研究会発表要旨資料
- 本田道輝 1997 「南部九州における脚台付甕の底部形成について」『人類史研究』第9号
- 垂水市教育委員会 1999 「垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書（3）後ヶ迫A遺跡」
- 垂水市教育委員会 2004 「垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書（7）迫田遺跡・森田遺跡」
- 垂水市教育委員会 1974 「垂水市史 上巻」

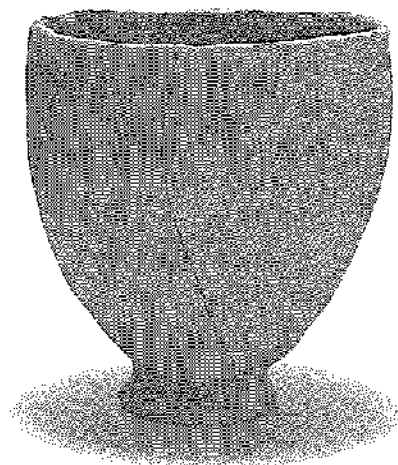




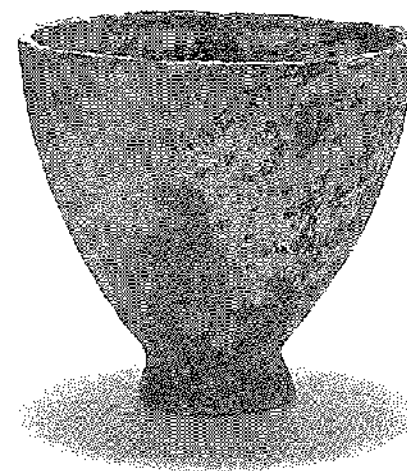
1



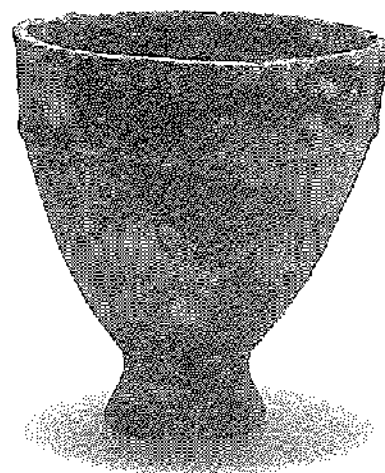
2



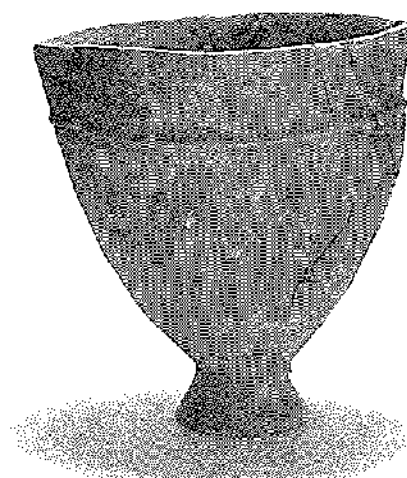
4



5

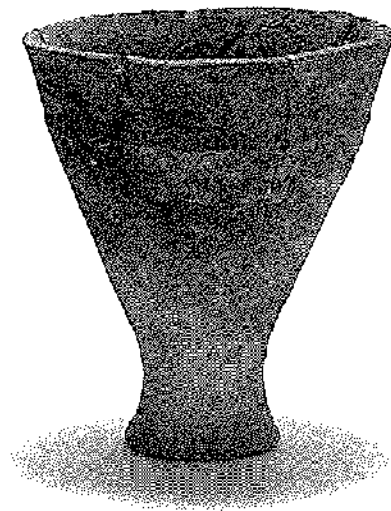


13

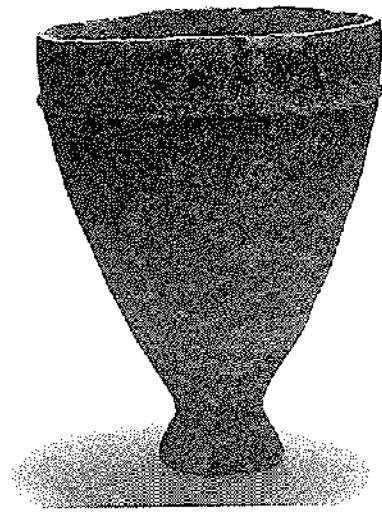


17

西ノ原遺跡包含層出土遺物(1) 甕形土器 1



19



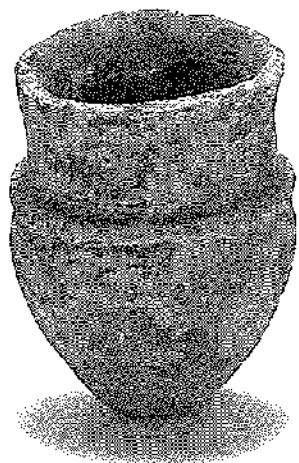
20



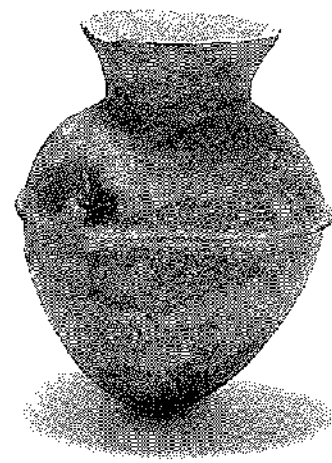
22



23

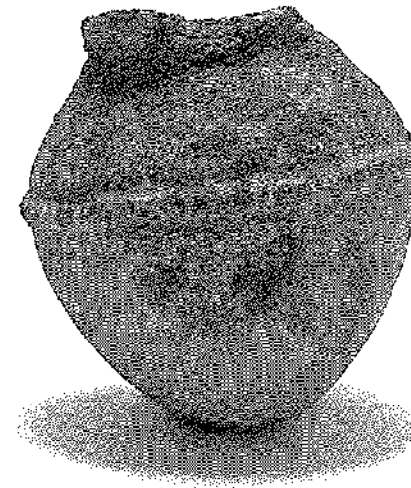


51

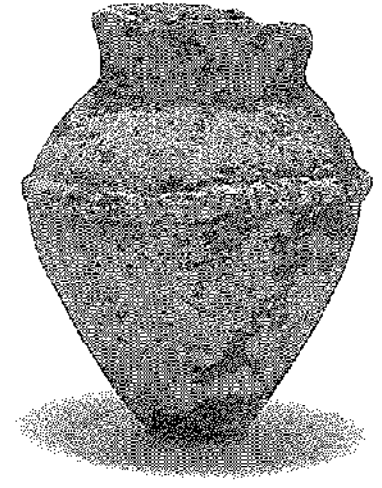


54

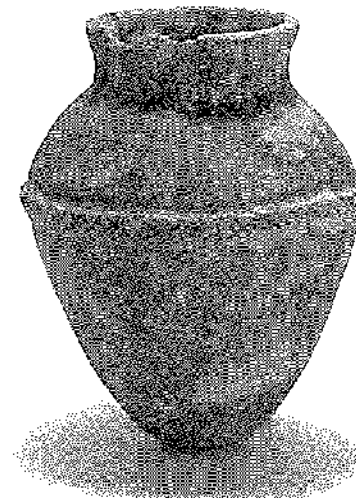
西ノ原遺跡包含層出土遺物 (2) 甕形土器 2, 壺形土器 1



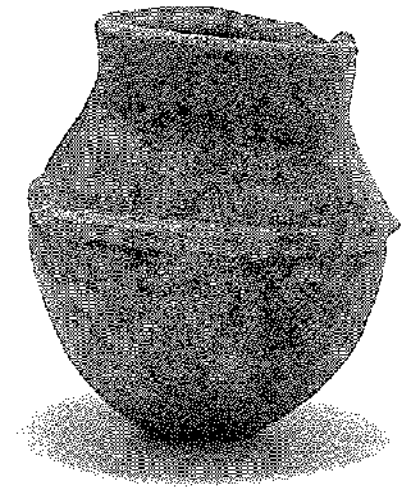
55



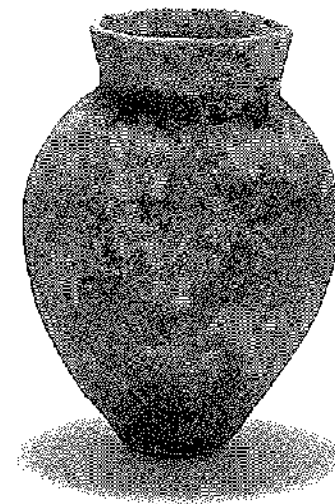
56



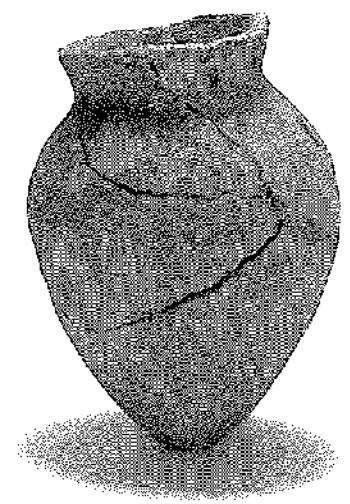
59



60



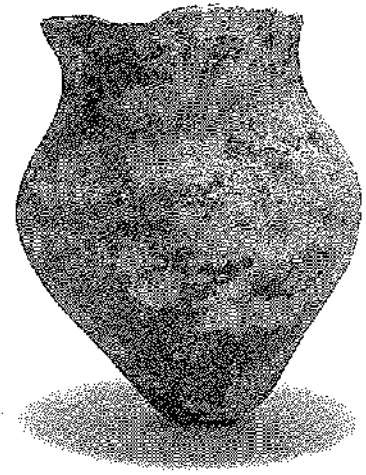
62



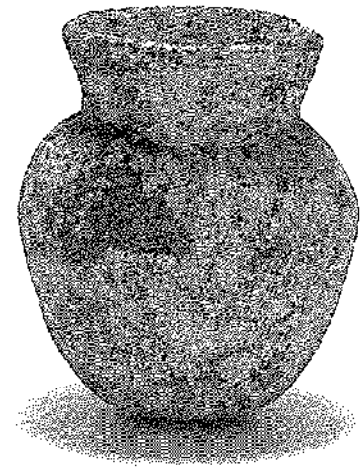
63

西ノ原遺跡包含層出土遺物 (3) 壺形土器 2





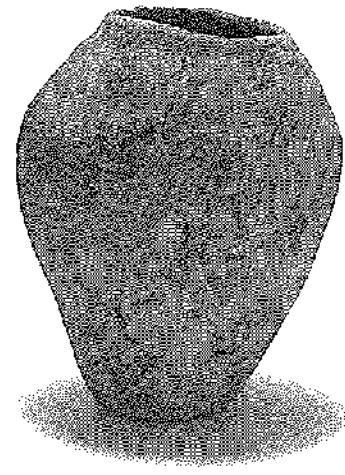
65



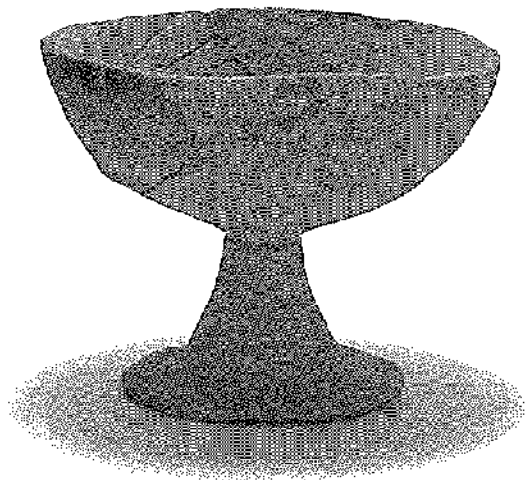
66



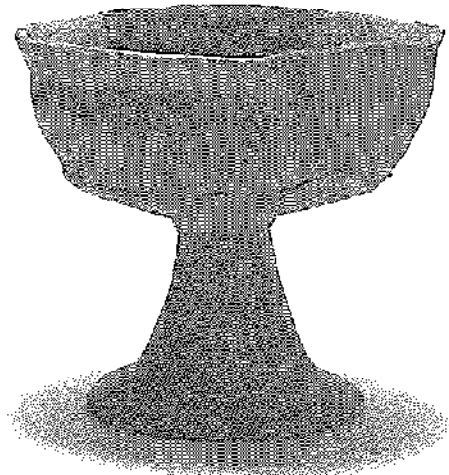
67



68

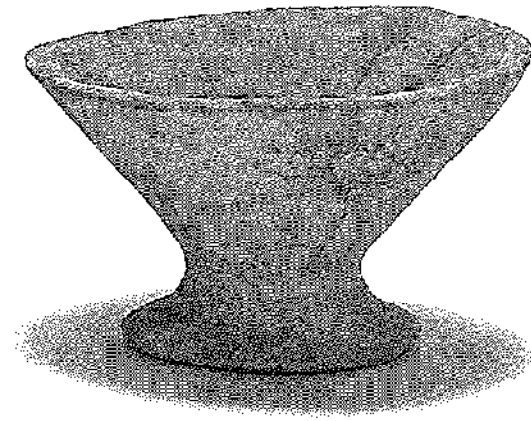


71

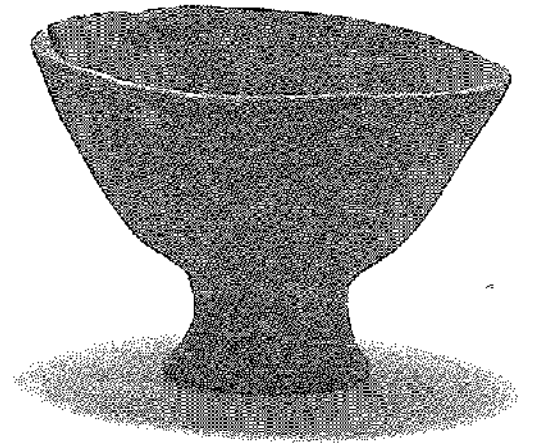


74

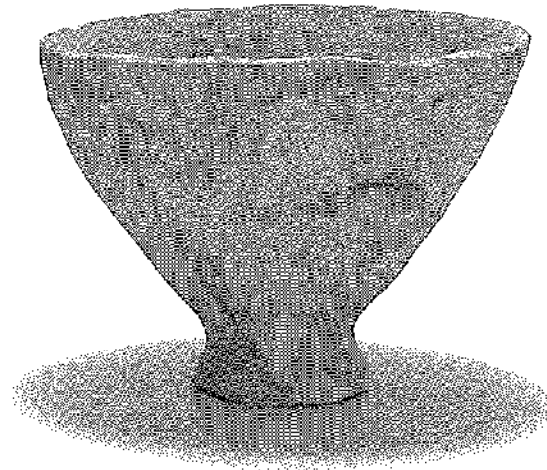
西ノ原遺跡包含層出土遺物 (4) 壺形土器 3, 高杯形土器



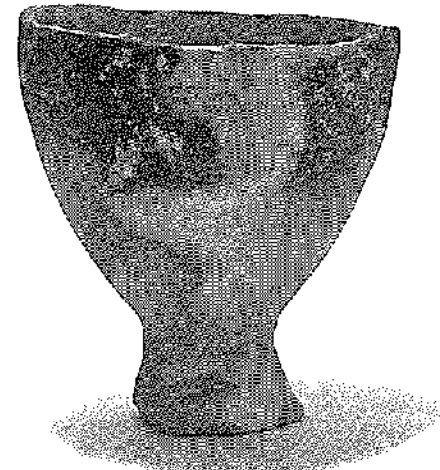
79



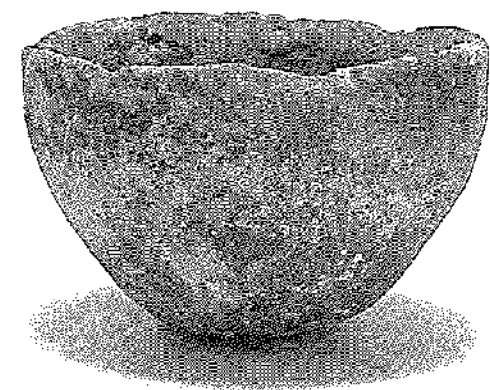
80



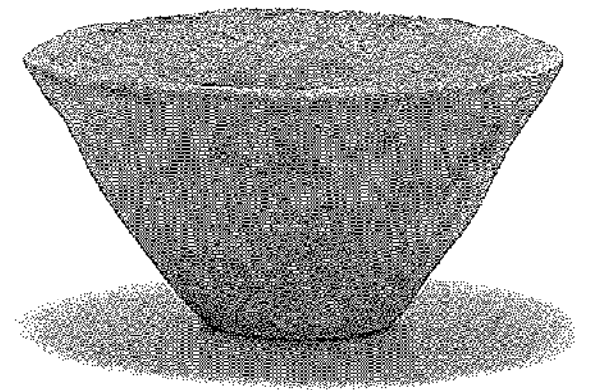
82



83



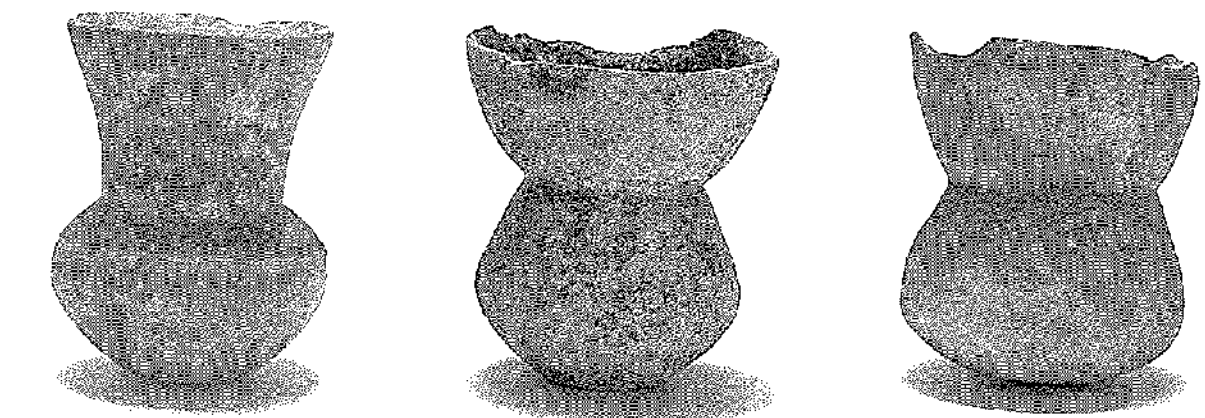
86



89

西ノ原遺跡包含層出土遺物 (5) 鉢形土器

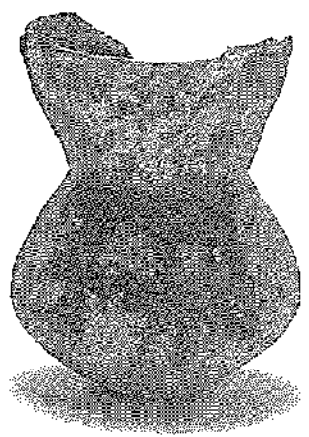




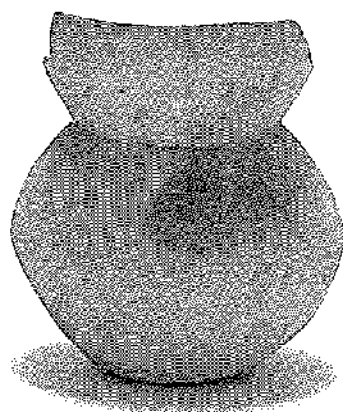
92

93

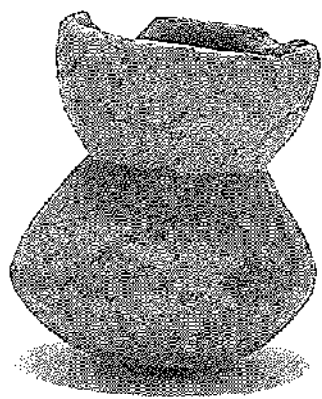
94



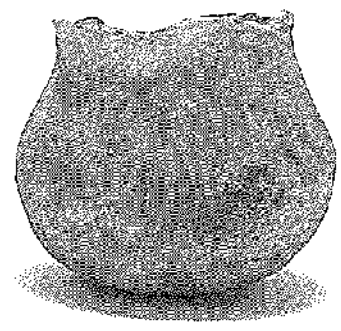
95



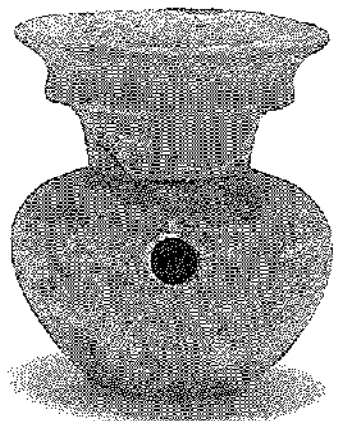
96



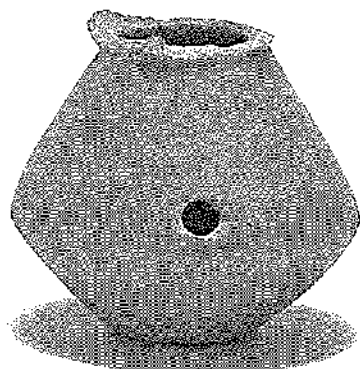
97



99

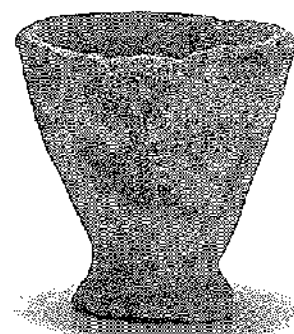


102

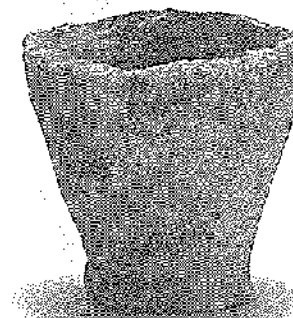


103

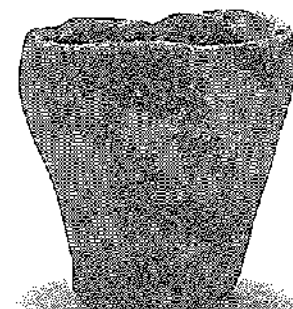
西ノ原遺跡包含層出土遺物 (6) 埴形土器



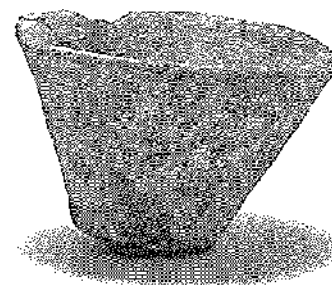
105



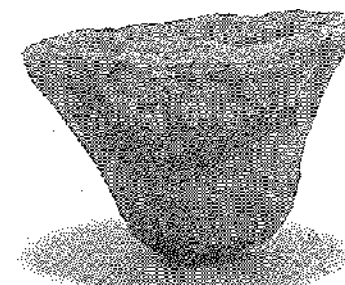
106



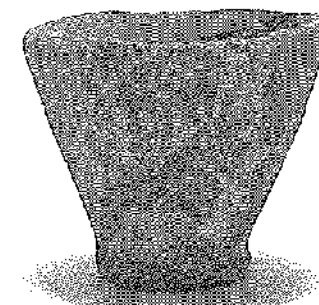
108



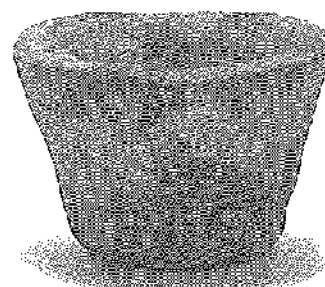
110



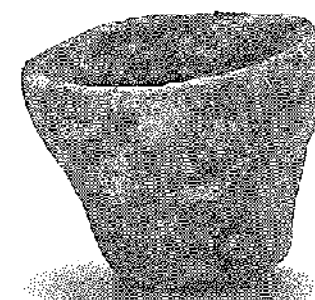
111



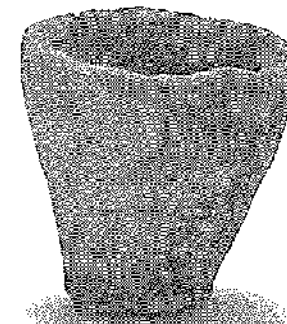
112



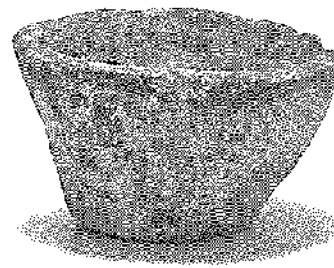
113



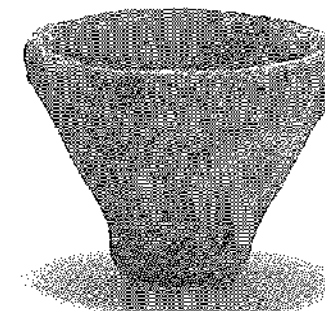
118



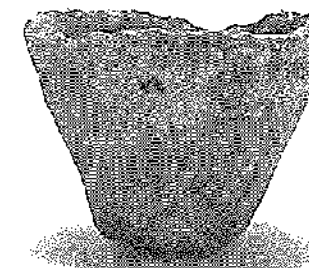
121



122



123



126

西ノ原遺跡包含層出土遺物 (7) ミニチュア

## あとがき

本遺跡からは、弥生時代後半から古墳時代にかけて使用されたと考えられているいわゆる成川式土器が土器溜り状に多数発見された。過去、垂水市においては、後ヶ迫A遺跡、迫田遺跡・森田遺跡等において良好な成川式資料がやはり土器溜り状に検出されているが、明確な遺構を伴った遺跡は発掘されておらず、その性格は不明であった。本遺跡において、明確な遺構の発見と土器溜りの性格解明が期待されたのだが、残念ながら遺構の発見・土器溜りの性格解明ともに明らかにはされず、引き続き、今後の研究が期待される結果となった。ただ、個々の出土遺物は資料性が非常に高く、南九州の成川期の様相を解明するのに極めて重要な遺跡と言えよう。

整理期間の不足や筆者の力量不足から、報告書が十分な内容のものには至らなかったのが遺憾であるが、どうかこのように報告書としての体裁を保つに至ったのは、ひとえに大隅地域振興局、鹿児島県教育庁文化財課、鹿児島県立埋蔵文化財センター・鹿児島大学をはじめとする各研究機関・各関係機関、発掘調査及び整理作業協力者をはじめとする各関係各位のご教示・ご協力によるものである。特に、鹿児島県教育庁文化財課埋蔵文化財係文化財主事堂込秀人氏には貴重な指導を賜った。これらの皆様方に感謝の意を表して、結びの言葉とくえさせていただきます。

垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書(10)  
砂防激甚災害対策特別緊急工事(垂水市牛根麓地区)  
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

### 西ノ原遺跡

発行 2009年3月  
編集 垂水市教育委員会  
鹿児島県垂水市旭町61  
☎(0994)32-0224  
印刷 株式会社 新生社印刷  
鹿児島市札元1-22-34

1 2 5 1 8